

滝沢馬琴 書籍の蒐集・抄録・借覧 (四)完

高牧 實

How TAKIZAWA BAKIN Collected Books

TAKIZAWA BAKIN, a famous Japanese novelist in the nineteenth century, collected a lot of Japanese books and Chinese books by buying them from bookstores and by getting books copied. He employed copyists who were samurais and doctors of the lower class.

He used the knowledge based on those books in writing his novels and essays. He was proud to show his knowledge to his members of the salons.

(7)

『読本類書名抄録』『唐山稗史類書名』。天保五年一月十三日、馬琴は、木村黙老から届けられた『読本類書名抄録』二巻のうちの初の一巻を抄録し、十八日、清右衛門をもって返本した。

一月十四日、十五日、馬琴は、黙老方に頼んで抄録した『唐山稗史類書名』の遺漏六〇余種を抄録した。

なお、丁子屋から届いた浄瑠璃本一〇冊の作者、板元、年月など、二十五日に抄録し、五月四日、清右衛門をもって、丁子屋に、過日届いた一冊を加えて、一一冊を返本した。

『月波日記』（『大和河内巡行記』）。天保五年二月八日の桂窓宛の書翰で、馬琴は、桂窓自著『大和河内巡行記』許借に礼を述べ、五月二日の同人宛の書翰に、『月波日記』二冊などの恵借に多謝し、家内病人あって冗紛中のため黙老へ廻したところ、殊の外賞鑑、写させたい、しばらく貸してもらいたい由、と認めた。⁽¹⁾

三月二十七日に送本を受け取り、四月朔日、清右衛門に黙老方へ届けるよう申し付け、黙老から五月七日に上冊、二十七日に下冊の返本を受け取り、七日に上冊を、二十八日、二十九日に下冊を読んだ。

馬琴は、七月十二日、筆工大嶋右源二に原本二冊と料紙を渡し、二十八日、その写しと原本二冊を受け取り、『塩尻』抄の写しの筆料とも筆料金一朱と銭二〇〇文を支払った。

八月十六日の桂窓宛書翰に、『花染日記』⁽²⁾などと一緒は今便で返上する、紀行三部のうち、『花染日記』が第一の出

来、『月波日記』がその次、と認めた。馬琴の申付けを受けた清右衛門が、十九日、飛脚問屋嶋屋佐右衛門方へ届けた。

『花月記』。天保五年二月十日、木村黙老が、使札をもって、『花月記』一冊と、西村重信（石川豊信）古錦画一枚を贈ってくれた。

『諸国名義集』。天保五年二月十三日、浅草寺町の泉屋庄次郎から、『諸国名義集』などを届けてきた。その前年暮に山本宗慎から『諸国名義考』を借覧し、一月十二日、河内屋茂兵衛に『諸国名義考』を注文していた。二月十八日の篠斎宛書翰に、藤原安麻呂の『諸国名義考』を、昔年見た時には、大平と川喜多の二序があったが、此節見た本には、大平の序のみで、川喜多の序がない、書賈が除け去ったのであろうか、川喜多も鈴のやの門人の由、学術そのほか名号など詳しく知らせてもらいたい、また、安麻呂の実名を教えてもらいたい、と書き送っている。

馬琴は、川喜多の序文がなく、摺りも悪いから、宗伯をもって、五分引きとするよう示談させた。代金を節句前に取りに来る序がなければ、節句に序があるので持参する、と申し入れさせた。

『奇魂』。天保五年二月十八日の篠斎宛書翰に、馬琴は、『奇魂』について示教を受けて初めて知った、大火で書買大かた類焼、買い取ることが今はできない、そのうちに買い取って見たい、と書き送った。

その翌年、天保六年二月二十一日の篠斎宛書翰に、馬琴は、前年の冬に一部買い入れて読んだ、近来出版の好書、作者佐藤（鶴城、民之介）氏と面識の由、悴宗伯の病症を診てもらい療治をうけさせてみたい、と書いてる。

三月二十八日、馬琴は、近来印行書のなかでよいのは『奇魂』、作者佐藤民之介、江戸神田土手下鏡屋に寓居の由、悴病症診でもらおうと問い合わせたところ、心術宜しくない無法者の由、松坂へ先年淹留して、篠斎子は懇意の由、貴兄存じておられれば、いかゞの人物か、内々で示教してもらいたい、術を売ろうと渡世に書を著わすものがある、

必ず心すべきこと、と桂窓に書翰⁽⁶⁾を送った。

桂窓は、その通りの人物、と馬琴に知らせた。馬琴は、七月朔日、貴兄が『奇魂』をよくは見ない由、野生も大いに不信仰になった、示教感謝する、と書き送った。⁽⁷⁾篠斎も委曲答えてくれた。⁽⁸⁾

『人中画』。天保五年二月十八日、馬琴は、篠斎へ書翰⁽⁹⁾を認め、唐山稗説『人中画』一帙を投惠され、繙閲したところ、一冊ずつ切れ／＼の物語、殊の外おもしろく、去年の御とし玉の『春柳鶯』より一段と役に立つもの、と謝礼を述べ、元来二四巻、唐山の書賈が、四冊を抜き出して『人中画』と書名をつけ、四冊一帙に拵えて売ったものようである、三冊は初めて見る物語、四冊めは、『今古奇観』に出ているものと一字の異同もない、『拍案驚奇』にある物語が、『今古奇観』に入っているような類のもの、恩賜の珍書ながら、介意なく愚衷を申し伝える、と評を書き送った。日記に、二月三日、年玉として惠贈された、四日、巻一、八日、九日、巻二、巻三、巻四を披閲し、巻四は『今古奇観』にある移花の旧話、見るに及ばず、と記した。

『浮世画類考』『浮世画師考』。天保五年三月三日、山本宗洪殿が、使札をもって、先に頼んでいた『浮世画類考』一冊を見せられた。浅草御蔵前の雁金屋より届いたもので、代銀五匁五分、高料であった。

馬琴は、筆工大嶋右源二へ、原本、料紙、手簡を、使をもって届け、急いで写すよう伝えた。五日、右源二の弟から写しと原本を受け取り、筆料錢一二四文を弟に預けた。七日、宗伯に、口状を申し付け、原本を宗洪殿方へ返本させた。

三月二十四日、木村黙老が、使札をもって、別本『浮世画師考』仮綴じ一冊を貸された。馬琴は、二十七日、九丁めから写し、二十八日、三丁半、十二丁の裏まで、二十九日、十六丁まで謄写した。

四月朔日、馬琴は、『浮世画師考』一綴を、黙老方へ返上するよう、清右衛門に申し付けた。

五月二日の篠斎宛書翰に、『浮世画類考』二本を見ているので、『作者部類』に画工大抵遺漏ないと思う、と書き送った。

『松蔭日記』。天保五年五月二日、馬琴は、篠斎へ書翰を送り、半紙本の『松蔭日記』を借用したいと申し入れた。先年の飯田町急火の折、失なうところあって端本となっていた。本所山名殿所蔵本を借りて、不足のところ写したいと思ったが、美濃本、馬琴の所蔵本は半紙本で都合が悪い、半紙本を所蔵であれば、不足の分ばり貸してもらいたい、と頼んだ。書林英大吉方に一本あるが、虫入りで高料、美濃本、不足分を写した方が利便と考えて、英方の一本を取り寄せなかった。

七月二十一日の篠斎宛書翰⁽¹²⁾によれば、篠斎のものが半紙本で、近便で貸してくれる、ということになった。

十月十六日、大伝馬町の殿村店から『松蔭日記』六巻が届けられた。馬琴は、早速、所蔵本と引き合わせ、一から二十条まで欠本であることを知った。二十八日、筆工大嶋右源二に、巻三、巻四の二冊と料紙を渡し、半紙の幅がせまいので、小口をつめて写すよう示談した。

十一月五日、筆工三田村三碩に、一条から八条まで見写しに写すよう示談し、原本二冊、ほかに別本巻二の一冊、料紙の半紙五帖を渡し、十八日、その写しと原本を受け取り、筆料七四枚分錢三〇八文を支払った。十二日右源二から巻三、巻四の写しと原本二冊を受け取り、筆料金一朱(錢一〇〇文過分)を支払い、巻五、巻六の二冊と料紙を渡し、二十九日、その写しと原本二冊を受け取り、筆料、ほかの分とともに、錢三二〇文(一〇〇文差し引いて)を支払い、巻一、巻二の二冊と料紙を渡した。筆料錢二九文不足に気付いて、後日、支払うこととした。十二月十四日、その写しと原本を受け取り、筆料錢三三四文を支払った。六冊の写しが済んだ。

十一月朔日の篠斎宛書翰⁽¹³⁾に、全書六巻允借を感謝し、拙蔵本一条より八条まで紛失、その分を写せば全書になるけ

れども、恩借本が並の半紙本より切形大きく一一行、拙蔵本が並の半紙本十行で切形が合わない、筆工見写しを難儀がって、是迄、皆透き写しとしてきた、透き写しでも誤写多い、強いて見写しさせれば誤写・脱文多く、用に立ちかねるようにもなる、借用本が写しもよいので、二重になるけれども、六冊残らず写させることに決着して、筆工に両三日前に渡した、大抵年内に写し終ると思う、来春には返本したい、全書貸されたので善本が出来る、借用本が安芸半紙の上物、美濃半紙、前々の切方にできない、斟酌して写させる、と書き送った。馬琴は、右源二に全六冊を写させたのであった。

翌年、天保六年一月十一日の篠斎宛別翰⁽¹⁴⁾によれば、篠斎が、返本する唐本と一緒に、三、四月頃に返送すればよい、と馬琴に伝え、馬琴は、二月二十一日の篠斎宛書翰⁽¹⁵⁾に、今便で松坂宅へ返上する、永々留め置き忝い仕合、と書き送った。三月七日に松坂へ着いた。⁽¹⁶⁾

『中将姫縁起』。天保五年五月十一日、木村黙老が、使札をもって、『中将姫蓮のまんだら縁起』の写しを見せられた。二月十九日、黙老から使札あって、谷文二（文晁の子）が京で写してきたもの、と知らせてきていた。清の康熙中に彼土繻刻のもの、文化年間、佐野東洲が所蔵していたのを目にした珍書であった。

二十二日、来宅した渥見寛重に、その唐本の挿画の写しを頼んで、原本を渡し、二十八日、その写しと原本を受け取り、筆料錢一〇〇文、天具帖六枚錢三〇文、計錢一三〇文を支払った。

六月五日、筆工山科宗仙に、原本と紙料九枚を渡し、二十四日、九丁の写しと原本を受け取り、他の筆料ともに、錢三三九文を支払った。

二十八日、清右衛門に、原本と黙老への手簡を、黙老方へ届けるよう申し付けた。

七月十八日、馬琴は、清右衛門に申し付けて、寛重へ『中将姫縁起』、『平妖伝』の挿画の写し画料残り錢三三三二文

を届けさせた。

『雲堂文集』。天保五年五月二十七日、山本宗洪殿が、使札をもって、『あかし物語』（『女五経』）、『雲堂文集』一冊を貸された。馬琴は、六月四日、『女五経あかし物語』五卷合本一冊を、一向の俗書、見るまでもないとして、清右衛門をもって、宗洪殿方へ返本した。五日、筆工山科宗仙に『雲堂文集』一冊と料紙、『中将姫縁起』九枚分の料紙を渡し、二十四日、両書の写しと原本を受け取り、筆料錢三三九文を支払った。七月四日、清右衛門に申し付けて、山本宗洪殿方へ手簡とともに届けさせて返本した。

『花染日記』。天保五年七月十三日、桂窓から自作『花染日記』二冊が届けられた。七月二十一日の桂窓宛書翰に、『月波日記』の写し出来次第、『花染日記』を写させ、両書とも写し終り次第に返本する、と書き送った。

七月二十八日、馬琴は、筆工大嶋右源二に、上下二冊と料紙を渡し、八月十七日、その写しと原本二冊を受け取り、筆料金一朱と錢四〇文を支払った。

馬琴は、八月十六日の桂窓宛書翰の十八日付の端書で、昨十七日に写しのできたので、今十八日に『花染日記』を飛脚へ出した、と知らせた。恩借の『月波日記』『三遂平妖伝』などと一緒に送本した。『花染日記』のなかに、至極無類秀逸の一曲がみえる、製本出来次第に、黙老へ貸して写させる約束をした。紀行三部のうち、『花染日記』が第一の出来、『月波日記』が次と評し、誤字少々を校訂し、紫墨で書き入れた、と伝えた。馬琴の申付けを受けた清右衛門が、十九日に飛脚問屋の嶋屋佐右衛門方へ届けた。

『瓊浦通』。天保五年七月二十日、山本宗洪殿が、使札をもって、『瓊浦通』六冊を貸された。筆工三田村三碩が来宅し、手透き、写しものしたい、と申し出た。馬琴は、巻一、巻二を披閱し終えていた。三碩に、巻一と料紙七一枚を渡し、二十七日、その写しと原本を受け取り、筆料金一朱（錢六三文過分）を支払い、巻二、巻三の二冊と料紙を

渡した。二十三日、二十四日、巻三から巻六を披閲していた。

八月十三日、三碩から写しと原本二冊を受け取り、筆料金一朱と錢八文（六八文を差し引いて、前記六三文）を支払い、巻四、巻五の二冊、料紙を渡した。馬琴は、巻二の一〇丁ばかりを校訂した。眼病よくなり、かすんで目やにが出た。二十一日、三碩から写しと原本二冊を受け取り、筆料金一朱と錢一八文を支払い、巻六と料紙を渡した。勘定違いをして、料紙二帖と九枚のところ、三帖と九枚を渡した。二十八日、写しと原本を受け取り、他の写しものとともに筆料錢二七八文を支払った。九月十三日夜、眼力不自由ながら、巻一半冊を校閲した。

十一月朔日の篠齋宛書翰⁽¹⁹⁾に、奇はないが、開闢より長崎のことを書き、官府の秘籍なども粗記した実録、誤りも少い、俗書ではあるが有用の書、と書いている。

『板倉筆記』。天保五年八月十四日、木村黙老が、使札をもって、『板倉筆記』二冊、製本できたとして貸された。馬琴は、十六日までに披閲し終え、誤脱があまりにも多いので、黙老のために校訂することとして、二十二日、二十三日、校訂して雌黄を施した。

二十八日、筆工三田村三碩に、原本二冊と料紙を渡し、九月十三日、その写しと原本を受け取り、他の筆料と合わせて錢三七二文を支払った。その日記の記事に『板倉博道手記』二冊と記している。

十六日、清右衛門をもって黙老方へ二冊を返本した。あと製本できたとして、黙老から三冊を清右衛門に預けられた。その夜、翌十七日、二十一日に校閲して雌黄を施し、二十五日、三碩に二冊と料紙を渡した。十月朔日、残りを校閲し終えた。十月十日、三碩から写しと原本二冊を受け取り、筆料錢三八〇文を支払い、原本一冊と料紙を渡した。十九日、三碩の老母が、料紙一〇枚不足を受け取りに来宅した。

二十四日、馬琴は、黙老からの使札に、三冊の内の写し終えた二冊を渡して返本した。二十五日、三碩から写しと

原本一冊を受け取り、筆料錢二〇七文を支払った。

『越後雪譜料図説』（『越後雪譜料』）。鈴木牧之より、「雪譜料」として追々認め届けてきた「越後雪の図説」が、数百枚となったので、馬琴は、天保五年九月十五日、離ればなれでは見るのに不便、調べて半切紙一卷つなぎ立てた。十六日、二巻分をつなぎ立て、獵説の部の二巻とした。十八日にも二巻つなぎ、十九日にも三巻つなぎ合わせ、一卷五〇枚前後の八巻とした。

二十九日、表具師万吉に、八巻の仕立を申し付け、裏打入用の大半紙五〇〇枚、共口美濃紙一二五枚を渡し、そのほか小巻分も申し付け、有合の西のうち二八枚を渡した。

天保十年八月十二日頃の桂窓宛宛に、『越後雪譜料』、画卷八巻、三重箱入、代金三両二分で沽却したい、とみえる。馬琴は、牧之より追々画いて届けてきた「雪譜料」の画稿、疎画であるけれども、雪のこと画きつくしたものの、印本の雪譜（『北越雪譜』）は此の百分一もない、一卷五、六〇枚ずつの大幅、野生、『雪譜』の著述について牧之に断わり、画稿返すべきところ、さすがに惜しく、代金を出して野生珍藏してきた、実に海内一本の珍書、と説明している。

『後言』（『しりうごと』）。天保五年十月二十日、榊原本部家臣田中源治こと墨川亭雪麻呂が、使札をもって、過日約束の『しりうごと』三冊を貸してくれた。雪麻呂は、梅丸の蔵書を借り出して、馬琴に又貸した。馬琴は、十一月四日までに披閲し終えた。

馬琴は、丁子屋平兵衛にさがして届けるよう頼んだ。十一月朔日の篠斎宛書翰に、『しりうごと』について、ある人から借覽して至極おもしろく思い、丁子屋平兵衛に頼んだ、当今の江戸国学者流を誹謗した本、出版後、問題あって遠慮したか、本が一向にない、両三年前に、その作者が故人となった由、銀座の手代で琴彦という人の由、惜しむべき才子、手に入り次第、一部を貴君へ、一部を黙老へ世話したい、と認めた。その後、入手した。

翌年、天保六年一月十一日の篠斎宛の別翰に、『しりうごと』の評を書いた。篠斎も桂窓も所蔵していた。馬琴は、その後にも、桂窓へ、『しりうごと』の評を書き送っている。⁽²³⁾

『金剛談』『鳥おどし』。天保五年十一月六日、木村黙老が使札をもって、『金剛談』『鳥おどし』合本一冊を貸された。馬琴は、その夜に披閲し、十二日、筆工大嶋右源二に、合本一冊と料紙五帖を渡し、『金剛談』を先に写して届けるよう示談した。十六日、右源二が、弟をもって、合本二五丁の写しと原本を届けてきた。馬琴は、二十日、黙老からの使札に渡して返本した。二十九日、右源二へ筆料錢三三〇文（過分一〇〇文差し引いて）を支払った。勘定違いして、錢二九文不足、後日に支払うこととした。

翌年、天保六年三月二十八日の桂窓宛書翰に、『しりうごと』に対する屋代弘賢の答書『金剛談』、平田篤胤の答書『鳥おどし』、ともに、去冬中、黙老より借用して写させた、篠斎氏へ報らせたところ見たいとのこと送本した、篠斎方済次第に借り受けて見られたい、と書き送り、君子は人の悪をいわず、かゝる書を著して板にすることよくない、書に著わして譏るものあるを聞かない、などと屋代弘賢の著書について非難している。

『本朝世事談綺』。天保五年十一月十八日、清右衛門が、芝神明前岡田屋嘉七方から、『世事談』（『本朝世事談綺』）五冊を受け取って持参した。馬琴が、過日、清右衛門をもって、注文したものを、代銀三匁八分であった。馬琴は、十九日に披閲し、二十一日、清右衛門に、代金一朱を届けるよう申し付けて買い入れた。

『竜説考』。天保五年十一月二十日、木村黙老が、使札をもって、自著『竜説考』一冊を貸された。馬琴は、二十三日、清右衛門に申し付けて、渥見覚重に、その挿画の写しを頼むよう、原本と料紙美濃紙代錢二四文を届けさせた。

十二月十八日、お久和が寒中見舞に来宅し、挿画を写さないまゝ、原本を筆工三田村三碩に渡した由と、挿画の写しが年内には出来かねる由を、父馬琴に伝えた。馬琴は、挿画も三碩に写させるようにとの手簡を預けた。十九日、

三碩が来宅し、挿画を写しかねるので、画心ある者に頼み、二十五日まで写しを作る、と告げた。二十七日、三碩が、挿画大小五丁を持参し、筆料一丁銭二〇文ずつ、内一丁大幅につき銭一〇〇文を預かった。筆工の分は、来春早々に出来る、と馬琴に告げた。

『茶菓詩』。天保五年十一月二十一日、薄暮、馬琴は、招きを受けて関忠蔵方を訪ねた。相客は、関根江山、木下健蔵、日本橋辺りの唐物屋かがやの三人であった。酒食、菓子の饗応あって、主客長談、夜半に及んだ。席上、木下健蔵が、所持する小冊『茶菓詩』一冊を馬琴に贈った。夜九ツ半退散、八ツ時に帰宅した。饗残を重箱に入れ、送人をつけてくれた。

『静幽堂叢書』。天保五年十二月五日、木村黙老が、使札をもって、『静幽堂叢書』のうち六冊を貸された。馬琴は、六日、七日披閲し、十四日、雑纂一の一冊を筆工大嶋右源二に渡し、二十九日、その写しと原本を受け取り、筆料金一朱と銭二八文を支払い、同二の一冊と料紙を渡した。その後も写しを作成し続けたと思われる。

天保七年十月六日の桂窓に出した覚に、『静幽堂叢書』がみえる。金一分一朱、馬琴は払い本する直段を書き入れた。

『銅柱余談』。天保七年六月二十二日の篠斎宛書翰に、『銅柱余談』十卷合本四冊、珍書、先月借り出して書画とも写しが出来た、桂窓子へ貸し出した、文化中、間宮林蔵が奥蝦夷から満州まで行ったことを録した、異聞の多い、疎鹵ながら実地を踏んだ実録、と書き送った。六月二十一日、桂窓へ宛てて、和歌山にいる篠斎子へも『銅柱余談』を廻してもらいたい、と書翰を送っている。八月六日には、篠斎へ高松の黙老子へ廻してもらいたい、と書き送った。

その後、天保十三年八月二十六日頃の篠斎宛覚(代筆)に、大奇書四冊金一両一分と、払い本のなかに記している。十一月二十五日の篠斎宛覚(代筆)によれば、篠斎が買い取って、代金を他のものと一緒に支払い、馬琴が領収書を

篠斎に送っている。

『桜林』。天保十年八月十二日頃の桂窓宛覚に、『桜林』十四卷合本四冊、代金二両二朱と、馬琴が沽却したいもののなかにあげた。屋代弘賢の『古今要覧稿』のなかの桜譜で、写本料を多く出したものであった。

遡って、文政十二年十二月二十三日、終日、『桜林』写しに書き入れ、表紙をつけており、天保六年三月二十八日、馬琴は、花を好む桂窓に、桜の写生四冊を所蔵している、出府の折に見せる、人に貸すと損じ易いので、秘して誰にも話さない、と認めた書翰⁽³²⁾を出した。七月朔日、渴望の由、飛脚へ出して送ってもよい、忤なくなつて永久の蔵書とも思わない、好みの友人のためならば送ることいとわれない、出府の折なり、送本なり思召次第と、桂窓へ書き送った⁽³³⁾。翌年、天保七年十月六日の桂窓宛の沽却したい書籍の覚に、金二両としてあげた。十月十一日、不用の分として返送してきた『桜林』を受け取った旨桂窓へ伝えた⁽³⁵⁾。

その後、前記の天保十年に、馬琴は、野生極老、質物として貸金されてもよいけれども、余命心元ない、買い取りが願わしい、と嘆願した。翌年、天保十一年八月二十一日の桂窓宛書翰⁽³⁶⁾（代筆）によれば、桂窓が、四か年以前の価（金二両）より安ければ買い入れたい、と伝えたけれども、黙老が所望したので売り渡していた。馬琴は、その旨を認めた書翰を出したのであった。

『封神演義』。馬琴は、天保十一年八月二十一日の篠斎宛書翰⁽³⁷⁾（代筆）に、『封神演義』を先年買い取り、しばらく所蔵していた、久敷ことで具に覚えていないけれども、「玉藻前」「三国白孤伝」の自家ものではあるが大筆ではない、と認めている。

『太平義士絵伝抄』（『忠臣絵伝抄』）。天保十一年十月二十一日の桂窓宛書翰⁽³⁸⁾（代筆）で、享保中の出版、ほどなく絶板、世に甚だ稀なもの、文化中、全一両一分の高料にて買い入れ、今以って秘蔵、儒生清水氏に作者片山氏略伝を

書き入れさず、只今衰眼で見ることできないので、金五〇〇疋位で売り払いたい、と申し送った。十二月十四日、篠齋にも、全部五冊、義士の肖像がある、元直段（金一両一分）で売り払いたい、心懸けてもらいたい、と頼んだ。⁽³⁹⁾ 遑って、天保七年十月六日の桂窓宛の覚には、金二両としてあげている。⁽⁴⁰⁾

蔵書目録に『太平義士絵伝記』五冊とみえるのが、本書であろうか。

『癸辛雜識』『齊東野語』『避暑録話』。馬琴は、桂窓からの問に答えて、天保十四年六月朔日、代筆の書翰を送り、『癸辛雜識』は、宋の周密の随筆、一帙六冊か八冊、世上稀なおもしろい書物である、と説明し、二二、三年前、英平古から届けてきたが、高料、三〇日限りの見料で、一冊一〇〇丁も抄録した、貸進してよい、と申し出た。⁽⁴¹⁾

その折、『齊東野語』一帙、『避暑録話』一帙も届けてきた。馬琴は、『癸辛雜識』とともに、三〇日限りの見料で、三帙ともに抄録した。

おわりに

買い入れたかったけれどもできなかった書籍、披閲して返却した書籍、記録して返した書籍、著作に急入用のものを板元の世話で借覧した書籍、見料を支払って借覧した書籍、借覧して抄録したのではないかと思われる書籍を追加する。馬琴の関心を知ることができる。

所蔵していたと思われる書籍、売却したり失なったりと思われる書籍、貸進を申し出ている書籍なども、日記、書翰から取りあげておく。

『還魂紙料』。文政十年一月四日、宗伯が、年始廻勤し、鶴屋喜右衛門方から『還魂紙料』を借りてきた。馬琴は、

六日夜、七日昼時までに、上下二冊を披閲し終えた。その後如何したか詳らかでないが、借覧して卒業したのであるうか。

『循環曆』。馬琴は、文政十年一月二十九日、英屋平吉方から『循環曆』五冊を借り受けて、披閲してみてもよければ買う、と告げたが、二月十四日、宗伯をもって返本した。翌々年、文政十二年二月十三日、日雇人足をもって、岡田屋嘉七方へ『循環曆』を注文させ、持参した同書五冊を受け取ったが、翌十四日、高料のため、同人足をもって返本した。

『竜背発秘』。馬琴は、文政十年一月二十九日、鶴屋から借り受けてきた『竜背発秘』二冊を、その夕方に披閲した。少々披閲しきれなかった。その後については詳らかでない。

『大学衍義』。文政十年三月二日の篠斎宛書翰に、有用の書であるが買い入れていない、『大学衍義補』の方をと思いながら、『大学衍義』より甚だ高料、つい求めなかった、と認めている。

その後、天保三年十月十八日、河内屋茂兵衛に、『大学衍義』『大学衍義補』が、大坂の仲間の相場で何ほどか、知らせてもらいたい、と申し入れた。⁽⁴³⁾茂兵衛が直段の書付を馬琴に送った。十一月二十五日、『大学衍義補』をほしいと思いつけているが、何分高料、『大学衍義』をまず買って、繰り廻しよい時に、『大学衍義補』と買い替えたい、『大学衍義』金二分四朱の一朱を引いて、幸便の折に、積み合わせて送ってもらいたい、と茂兵衛に注文し、『俠客伝』、『美少録』の潤筆料で勘定したい、と申し入れた。⁽⁴⁴⁾

翌年、天保四年四月九日の茂兵衛宛の覚に、代金二分二朱の由、それより下直の本なければ、二分二朱で買い入れたい、と書き送った。

天保五年一月十二日の茂兵衛宛別翰に、先達て書籍の直段に愚意を述べたので、去年中注文の書物を送られないの

だろう、と察している、他から『大学衍義』があると申ししてきたが、二重になってはと買わなかった、後悔している、丁子屋平兵衛が大坂へ参った折、談じたとのこと、平兵衛は何とも申しこない、などと書き送った。

六月十八日、平兵衛が、在府中の茂兵衛を同道して来宅した。馬琴は、『大学衍義』などについて平兵衛に談じた。翌年、天保六年一月十一日、茂兵衛宛別翰⁽⁴⁷⁾を認め、『大学衍義』を船積み幸便で送ってもらいたい、追々老年に及び待ちわびしく思っている、代金を潤筆料で差し引き勘定しても、別に金子で勘定してもよい、都合よいように願いたい、と茂兵衛に申し入れた。

なお、入手したかどうか、詳らかでない。

『排悶録』(『通俗排悶録』)。文政十年九月七日、画工英泉が、使をもって、約束の六樹園(石川雅望) 訳、英泉画の『排悶録』三冊を届けて見せてくれた。馬琴は、十一日朝、それを披閲し、十一月八日、おみちに申し付け、英泉方へ届けさせて返本した。

『中条流産科全書』『産科指南』。文政十年十一月五日、英屋平吉が、使をもって、『中条流産科全書』一冊、『産科指南』二冊を届けてきた。歳の暮、十二月二十六日、馬琴は、来宅した平吉からの使に、両書を渡して返却した。その間、宗伯が代筆して日記を書いて、御読書終日、御読書消日と記し、何を読んでいたか記していない。馬琴の両書披閲については詳らかでない。

『西洋記通俗演義』。馬琴は、文政十一年三月二十日の篠斎宛書翰に、『西洋記』(『西洋記通俗演義』)、『随唐演義』など所蔵される由、『随唐演義』『随史遺文』は先年一覽したが、『西洋記』は、西洋の事を記したのか、渴望する、恩借願いたい、と頼んだ。

その後、天保五年一月六日の篠斎宛書翰⁽⁴⁸⁾に、明板の大本物には、『西洋記』のように一向におもしろくないものが

ある、唐本小説『説唐伝』もその類かと思われる、と書き送っているので、『西洋記』を借用して読んだ、と思われる。

『文教温故』『国姓爺伝』。文政十一年九月二日、鶴屋喜右衛門が、使札をもって、約束の『文教温故』一部、『国姓爺伝』一部を届けて貸した。八月十七日に中村仏庵が来訪し、山崎美成著述の文教何とかという本、和泉屋庄次郎方より出版の由を話したので、馬琴は、二十一日、清右衛門の下男定吉をもって、関忠蔵・源吉父子へ借用本を返却し、文教何とか新著作借用を申し入れさせたが、父子他行のため借用できなかった。その後、喜右衛門方の嘉兵衛が来宅した折に、申し入れたのであった。

九月二日、関忠蔵が、使札をもって、『文教温故』を貸進してきたが、馬琴は、手許にあるので、直ちに返本した。十一月十八日に、下の巻を披閲し、夜、卒業した。

翌年、文政十二年一月十九日、馬琴は、清右衛門をもって、鶴屋へ、返本二六部、借入本三四部、『鄭氏紀事』一部、『文教温故』一部、代銀五一匁五分、金にして三両二朱を届けさせた。『文教温故』など、見料を支払って借覽していた。

『台湾鄭氏紀事』。文政十一年九月五日、馬琴は、風邪悪寒、平臥して『台湾鄭氏紀事』を披閲した。十月二十七日、松前老公の使の太田九吉が、奇説を聞きに来宅した。対面した馬琴は、さしたる奇説がない、『台湾鄭氏紀事』がよい、読まれては如何かと話した。十一月十七日、十八日、馬琴は、中の巻を披閲した。

蔵書目録にみえない。借覽していたのであろうか。松前老侯には貸進していない。

『妙々奇談』。馬琴は、文政十一年十月六日の篠斎宛の書翰に、『妙々奇談』を見られた由、老拙はまだ見ていない、求めて見たくもないのでそのまゝ過ぎて、素人の蔵板、梓行して後世まで恥を残すのは、実に嘆ずべきこと、と

書き送った。儒者の番付で、出るよりはやくもめ合が起きて、早々にかくして、見せないようにしたもの、儒者の業はもの／＼しいが、地がねは大俗、最もにが／＼しきこと、と批判した。

天保七年一月六日の篠斎宛の別翰⁽¹⁾には、『妙々奇談』を引合いに出して、『妙々奇談』以来、うらみもない人を嘲哂して、自身の才名を売ろうとする書が多く出るのは、よからぬこと、と書き送って、『妙々奇談』を批判し続けた。

その間、天保五年十月二十一日、丁子屋に、『妙々奇談』をさがすように頼んだ。二十三日、丁子屋平兵衛が『妙々奇談後編』上下二冊を持参した。馬琴は、早々に上を、二十五日に下を披閲した。十一月五日、丁子屋が手代をもって、前編二冊を届けてきた。馬琴はそれを読んで、抱腹、堪えがたい冗籍、と考えた。十二日、馬琴は、前後編四冊を、来宅した手代に渡して返本した。

『農業余話』。馬琴は、約束あって、文政十一年十月二十三日、月代をして、関忠蔵方を訪ね、夜九つ時、僕をもって送られて帰宅した。上野宮様家来鈴木一郎と初めて会った。忠蔵から『農業余話』を借用した。十一月十三日に上の巻、十七日に下の巻を披閲し、二十日、清右衛門方の下男定吉をもって、忠蔵方へ返本し、謝礼としてみかんを届けた。二十一日、忠蔵が、使札をもって、みかんのうつりに開き鯛を贈ってきて、『農業余話』入用でないから、代料なしで譲る、と申し出た。馬琴は、代料なしで貰い受けるのは快よくない旨の手簡を認め、二十二日、定吉をもって、『農業余話』を忠蔵方へ返本した。

『上州簗輪軍記』（『上野国箕輪軍記』）『安西軍記』『二疋猫物語』。文政十二年一月十日に、馬琴が年始墓参、芝神明参詣のあと神明前の岡田屋嘉七に注文した書籍を、二十一日、清右衛門方の下男が持参した。『みのわ軍記』、『安西軍記』『二疋猫物語』など、高料であった。馬琴は、二月七日、終日かけて少々ずつ書き抜いて雑記に記し、十三日、日雇人足をもって、岡田屋へ返却した。

『天竺徳兵衛物語』。文政十二年一月二十一日、清右衛門方の下男定吉が、岡田屋嘉七方から馬琴注文の書籍を持参した。そのなかの『天竺徳兵衛物語』を、馬琴は、二月十三日に、『最上記』と両書合わせて銀三匁にすれば買い取る、と岡田屋へ伝えた。岡田屋が、『天竺徳兵衛物語』を銀八分、『最上記』銀三匁を二匁五分に値引きした。岡田屋手代の手違いもあったが、馬琴は、『最上記』を手に入れ、『天竺徳兵衛物語』を買わなかった。

『方則指要』。文政十二年二月朔日、馬琴は、鶴屋番頭嘉兵衛に『方則指要』『崇正通書』『通徳類情』を注文した。二日、鶴屋からの使札が『方則指要』を持参した。馬琴は、早速に披閲した。

『選択宗鏡』。文政十二年八月六日、馬琴は、大坂の河内屋茂兵衛に、仲間へ問い合わせ、『宗鏡』『選択宗鏡』が、あれば直段を知らせてもらいたい、相応の直段であれば買い入れたい、なければ注文帳に記し扣えて、来年も心懸けてもらいたい、返事をもらいたい、と書翰⁽⁵²⁾に注文を書き加えて頼んだ。

しかし、茂兵衛から今はないと返事が来たので、十二月十四日、篠斎宛の書翰⁽⁵³⁾で、心懸け下さり、あれば早々に知らせてもらいたい、明春にも琴魚様が上方店へ行かれた折に、さがしてもらいたい、と申し入れた。

さらに、翌文政十三年（天保元）正月二十八日、さらに、二月二十一日、当春、琴魚様上京されれば、先便に申した通り、さがしてもらいたい、と書翰⁽⁵⁴⁾に書いて、重ねて頼んだ。

天保二年十一月二十五日の篠斎宛の書翰⁽⁵⁵⁾にも、未だ渡来してないという人もいるが、あれば是非欲しいので、心懸けてもらいたい、と頼んだ。

『六合内外瑣言』『西湖佳話』。馬琴は、文政十三年（天保元）一月二十八日の篠斎宛書翰⁽⁵⁶⁾に、『六合内外瑣言』は、『大平広記』『耳食録』のようなもので、短い怪談でおもしろい咄はない、『西湖佳話』は、西湖の故事を俗語まじりに綴った虚実相半のもの、いずれも、一、二冊ずつ読みかけ、卒業していない、読書の暇なく、借りものでせわしく、

卒業しないで返本した、と記していて、少々借覽しただけであった。

『笠翁十種曲』。馬琴は、文政十三年（天保元）三月二十六日の篠斎宛書翰別紙に、享和年間の拙作『はなかんざし』（『花鉞児』^{ハナカムザシ}）という小冊は、『笠翁十種曲』の中の『紫釵記』を訳したもの、と書いており、同書を所蔵していたと考えられる。蔵書目録に、『笠翁伝奇十種曲』二〇冊がみえる。

しかし、翌々年、天保三年九月十六日、河内屋茂兵衛に、出府の折話のあった『十種曲』、金二朱で、磨滅落丁ないよいよ本があれば、船積みで送ってもらいたい、と注文している。⁽⁵⁸⁾

十月十八日の河内屋茂兵衛宛書翰に、『十種曲』、只今、その本がない由、下直でよい本を送ってもらいたい、と頼み、十一月二十五日の同人宛書翰に、『十種曲』金二朱の本あれば、失念なく、『猿園』と一緒に送ってもらいたい、と重ねて頼んでいる。

その翌年、天保四年、桂窓が、金二分二朱で書肆から買い入れ、貸進してきたので、馬琴は、小刻金二朱で手に入る、書肆に返して然るべし、老拙に見せんとて買い入れたのであれば、何分にも気の毒、折角遠方から貸進されたので、来月頃に返上する、と七月十四日の書翰に認めた。⁽⁶¹⁾

篠斎が、李笠翁著述の『覚世名言』（『覚世名言十二楼』）と『笠翁一家言』を読んで、笠翁について尋ねてきたので、馬琴は、十一月六日の同人宛書翰で、それに答えた。野老が笠翁と称したのは、李笠翁を信仰したからではなく、かくれみのかさの歌から、蓑を略して笠翁を別号とした、笠翁の『十二楼』、『十種曲』によい趣向もある、猥褻の作もあるが、勸善懲悪を専文に綴っているのはよい、清の国初の人、西湖の頭に家があるので、湖上の笠翁と称し、富家の由、書齋を湖辺に作り、清帝に召されても辞して官に就かず、書齋の窓の下の机に倚り、詩文、稗史、伝奇を作る、風流が想像される、などと説明している。

桂窓から借用した『笠翁十種曲』の写しを作ったかどうか詳らかでない。所蔵本をなくした経緯についても詳らかでない。

『諸家人物志』続編。天保二年一月三日、馬琴は、年礼廻勤の宗伯の雇供人足太兵衛をもって、下谷三味線堀東条文左衛門（琴台）へ、新板合巻上下二帙ずつ二部を贈った。去冬、琴台著述の『先哲年表』『人物志』後編を贈られたので、その返礼をしたのであった。

二月朔日夜、『諸家人物志』続編を披閲した。『人物志』、『諸家人物志』とも日記にみえるが、『曲亭馬琴日記』別巻索引「書物書画類」に、琴台の『古今人物志補正』か、とある。

『秋燈叢話』。天保二年一月十七日、宗伯が、年始廻勤の帰路に芝神明前の岡田屋嘉七方へ寄り、『秋燈叢話』『猿園』『拍案驚奇』を借りて帰宅した。馬琴は、十八日夕、巻一・巻二の合本一冊を披閲し、二十一日、巻三、二十二日、巻四、巻五半分、二十三日、巻三・巻四合本、巻九まで、夜五冊め巻十一過半まで披閲して、二月十一日、少々抄録、十二日披閲し、二十八日、日雇太兵衛をもって、岡田屋へ借りていた三部ともに返本した。

『茶余客話』。天保二年二月二十八日、岡田屋から『茶余客話』（小刻薄本）四冊一帙が届けられた。馬琴は、早速繙閲して一冊半を、三月四日夜、三冊めを披閲し、十八日、十九日、二冊めまで抄録、二十日、三冊めを抄録し、二十一日、四冊めを披閲し、抄録して卒業した。四月二十三日、岡田屋へ届けて返本するよう、清右衛門に申し付けた。『四庫全書』。天保二年三月二十一日、馬琴は、年始礼に来宅した渡辺登（華山）へ、去秋中から借用していた『四庫全書』一帙を返却した。華山は、妹不幸のため年始を延引していた。

『続西遊記』。天保二年四月二十六日、馬琴は、篠斎へ、『続西遊記』の許借を願ひ出で、八月二十六日、允借の由に感謝し、抄録の暇ないので、まず、先借の本返上の後に貸してもらいたい、と願ひ、翌年、天保三年一月二十一日

にも同様に願った⁽⁶⁶⁾。四月二十八日、篠斎へ、惠借を楽しみにしている、拙著の資助にならないけれども、一入なつかしく思っている、と伝え、六月二十一日、恩借した『続西遊記』の序文、惣目を一覧し、土曜中に一覧しよう心懸けている旨を、書翰に認めた⁽⁶⁷⁾。四月十五日に『続西遊記』二帙が届いた。馬琴は、五月二十四日、六月二十一日、二十二日、巻三まで読んでいた。七月朔日には、上函八冊のうち三冊を読んだが、大暑、読書すらできない、日々多用の九十九回、百回を飛び読みした、作者が機変を嫌い至誠を旨としたこと、前集と趣を変えようとする無理な趣向である、などと略評も記し、河内屋茂兵衛によれば、『続西遊記』『後西遊記』とも、代金二分二朱である由であるが、買い求めるに及ばない、惠借のお蔭で読めるので注文しない、と書翰に書いて篠斎に出した⁽⁶⁸⁾。八月十八日、閏十一月七日、巻四、巻五、五冊め二回まで読んだ。

翌年、天保四年一月十五日の篠斎宛別翰に、去夏中、上帙のうちの五冊を読んだ、多用で借用二か年に及ぶ、急がない様子、自由ながら今しばらく貸してもらいたい、許容願いたい、と書き送り、二十五日夜、二十六日夜、六冊め二十二回まで、三月三日夕方より二十九回まで、五日昼後より七冊め三十五回まで披閲した。

五月三日、馬琴は、序、目など抄録し、八日、九日、下帙のうちから飛び読みし、十四日夕方、九十六回末から百回まで披閲して卒業した。

遡って、天保三年八月二十六日の黙老宛の書翰によれば、馬琴が著述で読む暇ないので、一帙ずつ又貸してもよいと伝えていて、黙老が一時、馬琴から借用して読んだ。天保四年五月朔日、黙老は、使札をもって、略評二綴、惣目録抄録を馬琴に見せた。馬琴は、黙老所望通り、抄録に書入れをして返した。二日、略評に対する答評など半切紙一卷に書いて、清右衛門に、今明日中に、黙老方へ届けるよう申し付けた。

五月十日、馬琴は、国字評を夕方までに一一丁余を、十一日夕方までに一六丁を稿し、十三日、終日、国字評を再

考、遺漏分四丁半ほど加えた。篠斎への謝礼とするためであった。

五月十六日、篠斎に、『続西遊記』二帙を今便で返上する、と伝え、同封の馬琴の評、黙老の評について書き添えた。久しき借留めの礼に拙評一卷、稿本のまゝ送る、副本がないので幸便で返してもらいたい、黙老が略評を見せられた、あまりの略評であるけれども一緒に送る、黙老も所蔵していないので、巨細の評はできないのではないか、返却のあとに黙老に見せようと思う、追て表紙を掛けるのでこまかには折らないでもらいたい、拙評に考えられるところあれば、知らせてもらいたい、黙老評についても同様に願いたい、黙老も歎ぶことと思う、と申し入れた。⁽⁷¹⁾同日、桂窓にも書翰を送り、『続西遊記拙評』一冊、篠斎への礼に書いた、篠斎から見せてもらうようにされたい、と伝えた。篠斎は、馬琴の評を写しに出した。⁽⁷³⁾

『源氏物語湖月抄』。馬琴は、天保二年四月二十六日、河内屋茂兵衛に、素本『源氏物語』の下直のものを、『湖月抄』があればなおよい、素本で金二分位のを欲しい、と注文した。⁽⁷⁴⁾娘に贈るといふ。

その後、天保四年四月九日にも、同人へ『湖月抄』を、素人払本などで下直なもの、江戸相場より二割下直の品、不急、として頼んだ。⁽⁷⁵⁾

八月二十八日、鶴屋喜右衛門が来宅し、春に約束していた『湖月抄』の不足分を、上方板元に摺らせて取り寄せ、全部揃えたとして、全三〇冊、箱入を届けた。二十九日、年立合一冊、凡例、桐壺合一冊を、夕四つ時まで披閲した。翌年、天保五年七月二十九日に再曝し終え、八月朔日、五つ半時頃まで調べ、巻数見出を綴目に印した。二日、年立一卷を披閲した。十二月朔日、鶴屋嘉兵衛が、使札をもって、故主人喜右衛門が貸し出した『湖月抄』のうち、「あかし」の巻一冊を他から借りに来たので、その一冊を返本してもらいたい、と申し入れてきた。馬琴は、「あかし」の巻がない、『湖月抄』端本と詳しく返便した。宗伯に、それを話した。宗伯は、「あかし」の巻が「すま」の巻

に合巻となっている、と父に告げた。

二日、嘉兵衛から使札あって、『湖月抄』を残らず返してもらいたい、というので、馬琴は、箱入、残らず返却した。合巻となっていることを見ていなかった、疎忽のことを申した、すこぶる面目を失った、と後悔した。四日、清右衛門をもって、口状、訳合など詳しく鶴屋へ示談した。

『談海後記』。天保二年七月二十二日、馬琴は、雇人足太兵衛をもって、本所猿江の山名頼母殿方へ『慶長年録』二冊を返本し、近習書籍係の吉田三郎治、大坪仁助、池田欽兵衛方へほかの書籍を貸し給りたい、と申し入れた。『談海後記』全五冊を、太兵衛が預かってきた。馬琴は、二十三日、二十四日、『慶長日記』と比較し、『慶長日記』へ異談を書き入れ、八月三日、四日、披閲して卒業し、同日記と校合した。

馬琴は、十一月二十八日、宗伯をもって、山名頼母殿方へ返本し、貸進していた『関原合戦記』を催促し、近習三人方から返本を受け取らせた。

『潜確居類書』。天保二年十一月二十五日の篠斎宛書翰に、馬琴は、二、三〇年前に『潜確居類書』八帙を買ったけれども、磨滅多く、入用の折に繰り出して見ても、あいにく文字が欠けていて引用できず、いら立つばかり、代金半分損をして売り払った、著述に引用するため買い入れたもの、悪本であっては、甚だ遺憾、残念である、と認めた。本払いの時期が詳らかでない。蔵書目録にはみえない。

『醒世恒言』。馬琴は、天保三年二月十九日の篠斎宛書翰に、『醒世恒言』など四〇年ばかり前に見たが、大かた忘れた、何によらず所蔵の小説もの、追々恩借願いたい、と書き送った。四月二十八日には、篠斎へ『醒世恒言』入用の由、江戸でさがして直段を知らせる、と書翰を送り、同日、河内屋茂兵衛に、あるかどうか、直段を知らせてもらいたい、と書いて頼んでいる。⁽⁷⁹⁾六月二十一日には、江戸の書肆にはない、大坂の河内屋茂兵衛が、年々長崎へ唐本仕

入れに行くので直段を聞くと伝える書翰⁽⁸⁰⁾を篠斎へ送った。七月朔日、茂兵衛から本がない、といって来たことを書翰⁽⁸¹⁾で篠斎へ伝えた。

翌年、天保四年三月八日の篠斎宛書翰⁽⁸²⁾によれば、篠斎が入手したというので、馬琴は、今年中なりとも来年にでも恩借したい、と申し入れた。四〇年以前、六樹園（石川雅望）の蔵本を借覧、大かた忘失、という。

その後、天保七年一月六日の篠斎宛別翰⁽⁸³⁾に、宗伯死没後、家事多務、読書の気力薄くなって、夜分休筆の暇に少しづつ披閲する、幸便の節、脚賃多くかゝらない節、恩借したい、と書き送った。六月二十二日の篠斎宛書翰⁽⁸⁴⁾によれば、篠斎が松坂本宅へ連絡して飛脚へ出させた。二十日、大伝馬町横丁店から使をもって馬琴へ届けられた。馬琴は、飛脚賃金一朱と錢二八文を、その使に渡した。篠斎が、松坂宅に置いている本だから、一、二年手許に留め置いてゆる／＼披閲されたい、と馬琴に伝えてきた。馬琴は、此節多用、春中の宿念と異なり手透きに少しづつ拝見する、感謝する、と篠斎へ伝えた。

その後、天保十年六月九日の篠斎宛書翰⁽⁸⁵⁾に、古稀算賀書画会、鉄砲百人組同心番代出願、四谷転宅、衰眼、一冊だけ見て本箱へ収め、せめて半分でも拝見して、当年必々返上する、と書き送った。八月八日の書翰⁽⁸⁶⁾には、不眼のため読書の楽しみ廃したが、昼の内の手透きに一、二丁ずつでも読んで卒業したい、急いで返上に及ばないとのこと感謝する、と認め、翌年、天保十一年八月二十一日の篠斎宛追啓⁽⁸⁷⁾（代筆）に、恩言に任せて六、七年恩借、極老に及び、返上して安心したい、六、七年留め置く甲斐もなく返上遺憾、お礼申し尽せない、と飛脚へ出したことを知らせた。『繪園』。馬琴は、天保三年四月二十八日の篠斎宛書翰⁽⁸⁸⁾によれば、寛政年中かに『繪園』を金一分で買入れていたところ、山本法眼が所望されたので進上した、此節見たいと思つて、去年岡田屋から取り寄せた、帙なしで金二分二朱の高直、近頃、俗語小説も有益と、少々ずつ買入れたいが高直、書は衣食住の外故、囊中続かず、毎々齒を切る

こと多い、と高直故に買入れなかった。遡って、天保二年、一月十七日、岡田屋嘉兵衛から届けてきた『猿園』を、十七日、十九日、二月六日、十一日、十三日、二十四日、二十六日、二十七日に披閲し、少々抄録して、二十八日に、『拍案驚奇』『秋燈叢話』と一緒に、日雇人足をもって岡田屋へ返却していた。

その間、天保三年二月十九日の篠斎宛書翰に、明の万歴三十六年冬十二月、京師大雪大雷のよし、『獺園』に記してある、と書き送っている。抄録に依ったのであろうか。

九月十六日、河内屋茂兵衛に宛てて、当夏の代金一分二朱のよし、古本で金一分の位のがほしい、一分一朱まで良い本があれば、船積みの折に送ってもらいたい、と書翰に認めて出した。⁽⁹⁰⁾

『金蘭筏』（『金欄筏』）。天保三年四月二十八日、馬琴は、篠斎へ書翰を書いて出し、『金蘭筏』という小説、まんざらでもないので貸すとのこと、本箱へ仕舞っておくのであれば、恵借したい、と申し入れ、七月四日に受け取った。十七日、十八日に披閲し、十九日、二十日に抄録した。七月二十一日の篠斎宛書翰に、人情を穿っているが、巧みな脚色なく、勤懲正しくない、略評をお目にかける、と書き送った。八月十一日、同書半分から末の趣向は、『琵琶記』を悪く作りかえたもの、その評を帙中に入れて、来る十六日の飛脚並便定日に出す旨、篠斎に伝え、八月十六日、宗伯に申し付けて、瀬戸物丁の嶋屋へ届けさせた。同日に篠斎宛書翰を出し、評を今朝急に筆を執った、早急の筆ずさみ、もらしたこともあろうけれども、進上する、と伝えた。

『紀伊国名所図会』。天保三年四月二十八日の河内屋茂兵衛宛の書翰に、馬琴は、丁字屋平兵衛方の同書を借用しているが、久しく留め置くこともできない、古本で手ずれあってもいいから、出府之節にでも持ってきてもらいたい、『侠客伝』二輯にとりかゝるので早く欲しい、と書き送った。

八月二十一日、丁字屋平兵衛が来宅し、茂兵衛から届かないからとて、他から借りて持参した。九月二日、来宅し

た丁子屋平兵衛方の手代に渡して返本し、茂兵衛から着き次第に届けるよう申し入れた。七日、茂兵衛から八月二十七日早便で送本した由の案内の書翰を受け取り、十三日に、一部十冊を受け取った。

九月十六日の同人宛書翰⁽⁹⁶⁾に、飛脚並便送本の一部十冊十三日に落手、八月中旬から二輯に取りかゝっていて間に合わず、丁子屋平兵衛が他より借り出したものを急用に合わせ、九月節句前に返本した、道中で殊の外表紙がいたんだが、中身別条ない、三輯四輯の引用に引用、安心した、と書き送った。

『修方規矩』『万病回春』。天保三年五月二十六日、馬琴は、妻お百、宗伯、孫の太郎と大丸で反物を買って食事をした帰路、英屋平吉方へも寄って、『修方規矩』『万病回春』を出させ、近々届けるように申し付けた。その後如何したか詳らかでない。

『快心編』。天保三年七月朔日の篠斎宛書翰⁽⁹⁷⁾によれば、馬琴は、先の亥年の飯田町旧宅近火の折に、『快心編』を失っていた。有用の文のみは抄録していた。その後、篠斎が、入手して読んだところ至極おもしろい、見たいのであれば貸進する、と馬琴に伝えた。馬琴は、天保五年十一月朔日の篠斎宛書翰⁽⁹⁸⁾で、允借のことに感謝し、借用中の二書熟読返上のあとの楽しみとしたい、と返事した。

翌年、天保六年二月二十一日の書翰⁽⁹⁹⁾に、著述に出精しなければならぬので、読書の暇がない、恩借を願ひ出るまで見合わせてもらいたい、と篠斎へ書き送った。

その翌年、天保七年一月六日の篠斎宛別翰⁽¹⁰⁰⁾で、琴嶺（宗伯）下世後、家事多務、且衰老、読書の気力薄くなった、夜分休筆のわずかな暇に、少しずつ披閲したい、松坂本宅の宝庫に置かれているのであれば、いつでもよいので、幸便の折に恩借願いたい、と頼んだ。

六月二十日、大伝馬町横丁店から、使をもって、届けられた。飛脚賃金一朱と錢二二八文を、その使に渡した。馬

琴は、六月二十二日、篠斎に書翰⁽¹⁰⁾を出し、和歌山から松坂本宅へ連絡して、土用中に読めるようにと送本され、御賢息からも案内をいたゞき、両三年留め置いてよい、緩々披閲するように、とのこと感謝する、土用中も多務、なか／＼読書の暇がない、手透き／＼に少しずつ拝見する、長引くと思う、本宅へも書翰を昨日出した、と伝えた。

三年後の天保十年六月九日の篠斎宛書翰⁽¹⁰⁾に、馬琴は、転宅以来家事にまぎれ、衰眼、燈下の読書不自由となって、本箱におさめたまゝ、毎年曝書の節に出すのみ、せめて半分でも読んで返上しようと、久しく留め置く仕合、などと書き送った。篠斎は、取り急いで返本に及ばない、いずれ幸便の折に、と馬琴に伝えた。馬琴は、不眼ながら手透きに少しずつ読んで卒業したい、と八月八日に書翰⁽¹⁰⁾を認めた。

翌年、天保十一年八月二十一日、篠斎宛追啓⁽¹⁰⁾を代筆させて、衰眼で読書も出来ない、極老に及んだので、今のうちに返上して安心したい、六、七年留め置いた甲斐もなく、そのまゝで返上、憐察されたい、御礼申し尽し難い、と感謝して、飛脚便で返本した。

『参考保元物語』『参考平治物語』。天保三年七月朔日の篠斎宛の書翰⁽¹⁰⁾によれば、先年亥の年の飯田町旧宅近火の節、取り出したけれども、途中で本箱がぐだけて、『参考保元物語』『参考平治物語』など、本を多く紛失した、という。

十一月二十五日、河内屋茂兵衛に、両書の古本、代銀七匁位ずつで買い入れたい、下直の本を心懸けて、来夏頃までに送本してもらいたい、と注文した⁽¹⁰⁾。しかし、下直のものがなかったであろう。

二年後の天保五年一月二十九日、浅草寺町の和泉屋庄次郎が、小者をもって、馬琴注文の両書一五冊などを届けてきた。いずれも高直であった。二月、馬琴は、返本しないで留め置いていたが、晦日、高料のため返本した。

『吉原恋道引』。天保三年九月三日、山本宗俊殿が来訪し、約束の『吉原恋道引』一冊、『そゝろ物語』一冊を貸された。馬琴は、十月朔日、来訪された宗慎殿へ、両書を返本した。

『冠字考』。天保三年十月二十一日の河内屋茂兵衛宛書翰⁽¹⁰⁷⁾で、馬琴は『冠辞考』を、江戸より下直であれば欲しいと茂兵衛へ注文した。十一月二十五日の同人宛書翰⁽¹⁰⁸⁾によれば、茂兵衛が直段を知らせて来たので、馬琴は、『冠字考』『冠字考続貂』ともで、金二分三朱、下直の本を心懸けて、来夏頃までに送本してもらいたい、と申し入れた。

翌年、天保四年四月九日、馬琴は、去冬直段を知らせてもらったが、代料多過ぎるので、来年に考えるところとして、それまで下直の本を見出すよう心懸けてもらいたい、と茂兵衛に頼んだ⁽¹⁰⁹⁾。その後買い入れたかどうか詳らかでない。

『和訓栞』。天保三年十月二十一日、馬琴は、河内屋茂兵衛に、『和訓栞』一部などを注文する書翰⁽¹¹⁰⁾を認め、十一月四日に出した。江戸で買うより大坂の方が下直と思う、『俠客伝』に入用の本ではないが、仲間に直段を問い、下直の本あれば送ってもらいたい、と頼んだ。

十一月二十五日、茂兵衛に、『和訓栞』と『大学衍義補』の両書で金四両位のものないか、さがしてもらいたい、と申し入れた⁽¹¹¹⁾。

天保五年六月十三日、来宅した丁子屋平兵衛方の小者に、茂兵衛へ頼んでいた『和訓栞』について、伝言を託した。十八日、丁子屋平兵衛が、在府中の茂兵衛を同道して来宅した。馬琴は、『和訓栞』『大学衍義』『後漢書』について頼んだ。

翌年、天保六年一月十一日の茂兵衛宛別翰⁽¹¹²⁾に、『和訓栞』『大学衍義』を、当年には、船積み幸便で送本してもらえよう頼む、老年となり、甚だわびしく待っている、代金を潤筆料で差し引きしてもらっても、別に金子で勘定してもらってもよい、と書き送っている。入手できたかどうか、詳らかでない。

『琉球年代記』。天保三年十一月七日、居宅の地主旗本杉浦氏老母が来宅して、『琉球年代記』一冊を貸された。琉球使節が江戸へ到着していた。『琉球年代記』『中山伝信略』など、新刻蔵板ものが二、三種出た。馬琴は、老母に

『中山伝信略』折本を貸進した。

『折々草』。馬琴は、天保三年十一月二十五日の河内屋茂兵衛宛書翰⁽¹¹⁾に、建部綾足の『をりく草』を、先年見たけれども入用ではない、と書いた。

その翌日、二十六日、桂窓へ買い取らない旨書翰⁽¹²⁾を出した。馬琴は、大坂に八冊写本で、代金一分三朱の売本ありと知らせがあったけれども、当年、書籍多く買ったし、貴兄所蔵の由だから、買わないこととした、と伝えた。

翌々年、天保五年二月八日、馬琴は、借覧したい、と桂窓に書翰⁽¹³⁾を書いた。桂窓へ、綾足の著述について、示教してもらったことを感謝して申し入れている。その後については詳らかでないが、『近世江戸作者部類』に取りあげている。

『兵家茶話』。馬琴は、天保三年十一月二十六日の桂窓宛書翰⁽¹⁴⁾に、『兵家茶話』を購入された由、壮年の頃に一覽したまゝ、所蔵していない、序の折に写しを作って下さるか、貸して下さるか、文人が折々引用していて、有用の本、一本欲しいとかねて思ってきたので、頼みたい、と申し入れた。作者の日夏氏について、桂窓が尋ねてきたので、白石の弟子かと覚えているが、不確か、追って知らせる、借用の折の交易として、『魯西亞志』『魯西亞見聞集』(『魯西亞見聞録』)などを貸進する、と申し入れた。

その後、馬琴は、桂窓から松坂での筆工料などの知らせを受けて、十二月八日、江戸での筆工料の方が下直、借用して写しを作りたい、来年の幸便で送ってもらいたい、『魯西亞志』などの貸進承知した、来春飛脚に出す、と書翰⁽¹⁵⁾を出した。

翌年春、相互に貸進、借用したかどうか詳らかでない。

『紅襟夢』。天保三年十一月二十六日の桂窓宛書翰⁽¹⁶⁾で、馬琴は、桂窓に『紅襟夢』借覧を申し入れた。桂窓が買入

れたことを知らせきた。馬琴は、三〇年ばかり前に、金一分二朱で買って読み、のち、金一分で手放していた。

翌年、天保四年十一月六日の桂窓宛書翰⁽¹¹⁹⁾に、来年、脚賃のかゝらない幸便で借用したい、わざ／＼飛脚で送らないように、と頼みを書き送った。その翌年、天保五年二月八日、岡田やにもあるけれども、文化中に買った直段より、随分高くなっている、入手できないのではないもの、小刻ながら四帙もあるので、許借送本を無用に願いたい、と桂窓に断りを申し送った。⁽¹²⁰⁾二月十八日の篠斎宛書翰⁽¹²¹⁾によれば、岡田やにあるのが金一両であった。

その後、天保七年三月二十八日、馬琴は、少々見たい、処々書林を尋ねさせたが、どこにもないので、しばらく借用したい、一帙ずつでもよいので、土用休み中に披閲できるよう、六月中の幸便で送本してもらいたい、と桂窓に頼んだ。⁽¹²²⁾六月二十一日の桂窓宛書翰⁽¹²³⁾によれば、桂窓が、幸便ないので五月二十二日に並便飛脚へ出した。馬琴は、六月十九日に四帙を受け取り、六月暑中冷氣、日々綿入着用、土用休みなく読書の暇なく、少々ずつなりとも繙閲する、感謝つくしがたい、と書き送った。馬琴は、八月四日、翌年、天保八年六月十六日、桂窓宛の書翰⁽¹²⁴⁾に、小刻の唐本、夜分燈下に老眼では読み難い、返上延引、海容下さい、と申し送った。八月十一日の桂窓宛書翰⁽¹²⁵⁾に、馬琴は、借用延引を承諾されて安心した、手透きの折々に読み終えて返上する、と書き送った。

天保十年六月九日の篠斎宛書翰⁽¹²⁶⁾に、小刻本のため、ます／＼読めなくなつた、読まないで返上するのは遺憾、返しかねている、と認めた。八月八日、衰眼後、細字の唐本読めなくなつてきた、中本著作の種にしたいと考えたが、昔年読んだものの多く忘れ、今一度熟覧しないと種にもできない、沙汰あるまで留め置きたい、御親切千謝、と桂窓に書き送った。⁽¹²⁷⁾

『華夷変態』。馬琴は、天保三年十二月八日の桂窓宛書翰⁽¹²⁸⁾に、『華夷変態』五冊を入手された由、是まで見たことがない、『台湾紀事』に似たものの由、おもしろそうで、いつか見せてもらいたい、と申し入れた。

翌々年、天保五年一月六日の桂窓宛書翰⁽²⁹⁾にも、急がないから幸便の折に、恩借願いたい、と書き送り、二月八日、幸便に送るとの知らせに謝した。

しかしながら、その翌年、天保六年二月二十一日の書翰⁽³⁰⁾で、見たいけれども、当分送本を見合わせてもらいたい、近来、写本年々多く、四、五〇〇冊も出来、費用も少なくない、悴病身で読めない、老拙一人最後の楽しみ、身後には、速かに沽却するよう悴に申し聞けている、書淫故、奇書写させたく、いっそ見ない方がよいのではないか、今年より写しをやめるつもり、と心情を吐露した。その後も借用しなかったと思われる。

『南柯夢記』『牡丹亭還魂記』『邯鄲夢記』。馬琴は、天保四年一月十四日、桂窓に別翰⁽³¹⁾を書いて、取り斗い方を頼んだ。桂窓が、先頃、京から取り寄せた唐本のなかの、『南柯夢記』という伝奇八冊ものを、伝奇もの故に返本した。それを桂窓から知らされた馬琴は、趣向が自作の『南柯の夢』とは似るべくもないが、同じ書名とは一奇事、京都の書肆にまだ売れないまゝかどうか、幸便の折に問い合わせてもらいたい、百疋位ならば手に入りたい、それ以上であれば見合せてもらいたい、と頼んだ。

三月九日の桂窓宛の書翰⁽³²⁾によれば、桂窓から、高料であると伝えられた馬琴が、買入れない旨を桂窓に書き送った。

ところが、桂窓が、その後思い直して、その伝奇ものを買入れれて所蔵し、馬琴に貸し出した。

七月七日、馬琴は、飛脚問屋泉屋甚兵衛方の状配りから、桂窓が送本した『八洞天』四冊、『牡丹亭還魂記』『南柯夢記』『邯鄲夢記』『紫釵記』四種八冊一帙を受け取った。七月十四日の桂窓宛の書翰⁽³³⁾に、その四種一帙を受け取った、いずれも明の湯若土作の伝奇もの、『紫釵記』は所蔵している、『南柯夢記』『邯鄲夢記』を初めて見た、『南柯夢記』は、淳干髯の『槐安記』をそのまゝ伝奇に作ったもので、作者の新趣向がない、『邯鄲夢記』は、『枕中記』をその

まゝ伝奇にしたもの、『牡丹亭還魂記』は、文化中に持っていったけれども、他本と交易したので、今は所蔵していない、伝奇であるが、勸懲正しくなく、只淫奔を旨としていて、唐山でも譏る人多い、貸された本が大磨滅で読めないところ多い、『紫釵記』は、笠翁の『玉搔頭』に似た伝奇、この四種の伝奇、一向に値打ちないもの、買入れられるのをとどめ申すべきところ。遠方においてできず、是非ない、折角貸されたので、読んで近便で返上する、無益の雑費をおかけして遺憾、と書き送った。

馬琴は、七月九日、十一日、十八日、『牡丹亭還魂記』を披閲し、二十九日、序目を抄録した。七日、九日、晦日、『南柯夢記』を披閲し、二十九日、序目を抄録した。

十一月六日、馬琴は、『南柯夢記』など伝奇物八卷（八冊）、九月中にも返上すべきところ、八月中旬から急な著述に取りかゝり、心外にも延引した、今便で返上する、永々留め置いた、謝礼する、と桂窓に書き送った。⁽¹³⁶⁾

『多氣城の図』『多氣国司九代略』『多氣往古図』『多氣行状記』。馬琴は、天保四年二月二十二日、桂窓から恩借の

『多氣行状記』『多氣国司九代略』『多氣往古図』を受け取った。⁽¹³⁵⁾七月十四日、『多氣行状記』三冊、『多氣九代略』一冊を今便で返上する、『真名伊勢軍記』と同様であるから、熟覧のみで写さず、今便で返上する、と桂窓に書き送った。⁽¹³⁶⁾

十二月十一日、『多氣城の図』一本、写しができたので、今便で返上する、と桂窓に伝えた。⁽¹³⁷⁾秋、黙老に頼んで、高松藩中の土に写しを作ってもらうこととし、督促して間に合った。馬琴は、黙老方の筆者の『多氣城の図』写しを、

十一月二十四日、宗伯に比較させ、名札の書き誤りをぬり消して書き改めさせた。

『七修類稿』『瑯琊代醉編』『無冤録』。馬琴は、天保四年四月九日の河内屋茂兵衛宛の覚に、『七修類稿』の下直の本、『瑯琊代醉編』『無冤録』の下直の和本古本、あれば直段をまず知らせてもらいたい、と申し入れた。その後について詳らかでない。

『永享記』『中国治乱記』『大内義隆記』『西国太平記』。天保四年五月朔日、馬琴は、桂窓に、『永享記』所蔵なら借りたい、所蔵しないのであれば、篠斎にも知らせて、懇意の書肆へ問い合わせてもらいたい、と書翰に認めて頼んだ。⁽¹⁴⁾ 兩人とも所蔵していない、書肆にもない、との返事があったのであろう、五月六日、馬琴は、『俠客伝』に入用江戸で借用できない、良い写本あれば買いたい、丁子屋平兵衛帰府の折に、預けて持参してもらえば好都合、と河内屋茂兵衛に書翰を出して頼んだ。⁽¹⁵⁾ 五月二十五日、ない旨断わってきた。

桂窓は、京師の書肆に頼んだ由を馬琴に伝えた。馬琴は、七月十四日の桂窓宛書翰に、⁽¹⁶⁾謝意を認めて出した。

馬琴は、『美少年録』に入用として、『中国治乱記』『大内義隆記』『西国太平記』を、四月九日に茂兵衛へ借用を頼んだ。⁽¹⁶⁾ 丁子屋へ頼んでいたけれども、茂兵衛にも頼んだ。『美少年録』が残らず出来あがれば、丁子屋へ返すつもり、茂兵衛にも入用の間だけ借用したい、と申し入れた。いずれもなかったようで、その後については詳らかでない。

『華厳経』。天保四年五月六日、馬琴は、河内屋茂兵衛に、『華厳経』、直段どれほどか、あまり高直でなければ、船積みの折に送って欲しい、と書き送った。⁽¹⁷⁾ 二十五日、茂兵衛から書翰が届いた。代金二両一分という。二十九日、馬琴は、岡田屋嘉七方で問うと、『八十華厳経』金一両三分、『六十華厳経』金一両二分、『八十華厳経』はほかへ売る、『六十華厳経』の直段は引けない、ということであった。馬琴は、買い入れるのを見合わせた。

七月十二日、馬琴は、岡田屋から見料を出して借り受けることとし、清右衛門をもって、金二朱と銀一匁五分を支払い、『六十華厳経』二帙を受け取った。来春三月切に返本してもらいたい、との伝言をうけた。二〇冊あちこち飛び読みした。

七月十四日の桂窓宛書翰に、『六十華厳』を三月限りの見料で借りた、『六十華厳』は、唐山晋の時の翻訳の旧刻、八十巻の方二〇巻多くてよいが今手に入らない、華厳をよく読み込まなくては、『西遊記』の作意をあきらかにでき

ない、『六十華嚴』も黄檗の蔵刻で本多くない、世に生れて息を引とるまで、学問をすべしと念じている、一笑を、と書き送った。

十七日、黙老が、使札をもって、話を伝え聞いた『華嚴経』を、見料割合で見せてもらいたい、と申し入れてきた。馬琴は、上帙十冊を渡した。二十六日、使札をもって返本してきた。下帙十冊を渡し、八月二十九日、返本を受け取った。

九月五日、宗伯が読み始めた。馬琴は、多用で読み終えられなかった。

十二月二十二日、馬琴は、清右衛門に、見料金二朱と錢一六四文を預け、岡田屋へ支払い、返本するよう申し付けた。二十六日、清右衛門が、岡田屋の請取書を持参した。

『若紫源氏』。天保四年八月二十八日、山本宗慎殿が来宅し、『若紫源氏』六冊を、書肆から取り寄せた由で、貸された。十月朔日、清右衛門に申し付けて、宗慎殿方へ届けさせ返本した。

『遊戯三昧』。天保四年十一月朔日、木村黙老が、使札をもって、『遊戯三昧』一冊を貸された。馬琴は、二日夜、披閲して、二十一日に返本した。

『国号考』。天保四年十二月十七日、山本宗慎殿が来訪し、『国号考』二冊などを貸された。

『国史同断』。天保四年十二月二十日、木村黙老が、使札をもって、『国史同断』一冊などを貸された。馬琴は、二十三日夜、披閲した。

『鑑古抄』。天保五年一月二十九日、浅草寺町和泉屋庄次郎が、小者をもって、注文しておいた『鑑古抄』写本、六冊、『参考保元平治物語』十五冊、『五色線』二冊を届けてきた。いずれも高料であった。

馬琴は、二月朔日夜、『鑑古抄』を飛び読みした。二日、木村黙老からの使札に、六冊のうち巻一、巻二の二冊を

預けて、黙老へ貸し、十日、同人使札からその二冊を受け取り、卷三から卷六の四冊を貸進した。十三日、黙老へ、『鑑古抄』を金二分で譲ってもよい、と伝え、十七日、清右衛門をもって、譲る旨の案内の手簡を黙老方へ届けた。十九日、黙老が、使札をもって、代金を届けてきた。馬琴は、手許にある卷一、卷二の二冊を、清右衛門に申し付けて、黙老方へ届けさせた。晦日、来宅した庄次郎方の手代へ、『鑑古抄』を買い取る旨を伝え、節句前に代金を取りに来るよう、序なければ、節句に序があるので届ける、と伝えた。

『滝本法帳』。天保五年一月二十六日、山本宗洪殿が、使札をもって、改名した由を知らせ、『滝本法帳』刻本二冊を貸された。十一月十五日、馬琴は、清右衛門をもって、宗洪殿方へ返却した。『国書惣目録』にみえる『滝本二今法帖』二冊であろうか。

『五色線』。天保五年一月二十九日、浅草寺町の和泉屋庄次郎が、小者をもって、『五色線』二冊など、注文本を届けてきた。いずれも高直であった。

馬琴は、二月朔日、二日、その二冊を抄録し終え、十三日に返本した。

『筑志船物語』。馬琴は、天保五年二月八日の桂窓宛書翰⁽⁴⁶⁾で、村田春海作『筑志船物語』を所持しているか、問い合わせた。二月十八日には、篠斎へ、所蔵しているかどうか、『作者部類』⁽⁴⁷⁾に入用、一寸見たい、桂窓子か、懇意の仁所蔵ならば、序の落款、題目など写してもらいたい、と書翰に認めて出した。篠斎は、三月二十三日、委細に書いて送ってきた。馬琴は、五月二日の篠斎宛書翰に、疑霧一時に晴れた、感謝短楮に尽しがたい、百倍のよろこび大慶、と書いた。

『天明武鑑』。天保五年二月十日、木村黙老から使札あって、『天明武鑑』四冊を貸された。馬琴は、入用のところを書き抜いて、直に返本した。

『江戸百化物』（『当代江戸百化物』）。天保五年四月三日、木村黙老から使札あって、『江戸百化物』一冊を貸された。馬琴は、七日、同人使札来宅を幸便として、預けて返本した。

『隔簾花影』。天保五年四月二十九日、飛脚問屋が篠斎からの『隔簾花影』などを届けてきた。馬琴は、五月二日、『隔簾花影』唐本八冊一帙の恩借を謝し、書翰を書いて出した。⁽¹⁴⁾

病気少々快方に向かった頃、巻四を読み、『金瓶梅』の後編ともいうべきもの、『金瓶梅』にいい足りない因果応報を、丁寧⁽¹⁵⁾に解き分け、勸懲の意味をつくし、趣向巧ではないが、貫目ある、と七月二十一日の篠斎宛に書翰を認めて出した。

十一月朔日の篠斎宛書翰⁽¹⁵⁾で、五冊めまで見た、来春には卒業する、尚しばらく借用したい、と申し入れた。

五月十二日、十三日、巻一、十四日、巻二、七月二日、三日、巻二、八日、巻三、十二月十七日、十九日、二十日、二十一日、巻五、巻六、二十二日、二十三日、巻六、二十四日、二十五日、二十六日、巻七、七冊めまで読んだ。

翌年、天保六年一月十一日の篠斎宛別翰⁽¹⁶⁾に、二、三日前に卒業、因果応報と即色是空の説を広め、新奇の趣向がない、『金瓶梅』を蒸しかえしたものの、三、四月頃返上するようにとのこと承知した、序目、奇字など抄録して、暮春の頃返上する、と書き送った。二月二十一日、松坂宅へ返本すると書翰⁽¹⁶⁾で伝えた。

『両交婚伝』。天保五年四月二十九日、篠斎からの『両交婚伝』などを飛脚問屋が届けてきた。馬琴は、五月二日の篠斎宛書翰⁽¹⁶⁾に、唐本『両交婚伝』八冊一帙を送本してもらい恩借多謝、と書いた。十一月二十六日、巻二まで、二十七日、巻四半ば、二十八日、巻四、巻五、十二月二日、巻五、四日、八日、巻六、九日、十日、巻七、十二日、巻八を読み、十六日、巻一を再覧した。

翌年、天保六年一月十一日の同人宛別翰⁽¹⁶⁾に、『両交婚伝』を読み、奇妙の珍書、ことのほかおもしろく、これまで

恩借した小説のなかで、一番めでたい妙作と思う、寸暇あれば略評を書いて送るよう心懸ける、と書き送った。二月二十一日、松坂宅へ返送する、と書翰⁽¹⁵⁶⁾を書いて出した。見れば写させたいと思うけれども、当年から写本を中止しようと思ひ定めた、悴宗伯は病身で読むことできないから、予没後速かに沽却するようにと申し付けている、年来苦心して貯えた書籍、少々は子孫困窮の凌にもなるう、そのような了簡で貯えてきた、なども書いた。

『随得抄録』。天保五年十月五日、馬琴は、清右衛門に預けた木村黙老への返本包みの中へ、取り紛れて『随得抄録』一冊を封入したので、お百に、飯田町旧宅清右衛門方にある包みから取り出して持ち帰らせた。その後、二十四日に、黙老からの使札を幸便として、預けて返本した。借用の経緯については詳らかでない。

『劇場顕微鏡』。馬琴は、天保五年十月十五日、清右衛門の幸便をもって、『むしめがね』（『劇場顕微鏡』）の注文を鶴屋喜右衛門方へ申し入れた。十九日、清右衛門が、注文の『劇場虫めがね』上編ない由で、下編を借りきて馬琴に渡した。馬琴は、二十三日、下編を返却するよう清右衛門に申し付けた。

十二月十一日、木村黙老が、使札をもって、前後四冊を貸された。黙々漁隱（黙老）の著作、借覧したあと、十七日、黙老方への返本の包みを拵え、十八日、清右衛門に申し付けて届けさせ返本した。

『秋雨物語』。天保五年十一月五日、丁子屋が、手代をもって、馬琴が頼んでおいた『秋雨物語』（まるのやかく子作、中本、伊勢屋忠右衛門板）全九冊を貸し出してくれた。馬琴は、その夜、六冊を繙閲し、六日三冊を披閲した。十日、宗伯も一覽した。十二日、来宅した丁子屋の手代に渡して返本した。

『土佐節定家』（『土佐本定家』）。天保五年十二月十一日、木村黙老が、使札をもって、『土佐節定家』一冊を貸された。馬琴は、十七日、『土佐本定家』一冊を、黙老への返本と一緒に包みを拵え、十八日、清右衛門に黙老方へ届けさせて返本した。

『桂林漫録』『紅毛雜話』。天保五年十二月二十五日、清右衛門が、岡田屋から『桂林漫録』『紅毛雜話』を受け取って持参した。過日、清右衛門をもって、岡田屋へ注文したものであった。購入したかどうか詳らかでない。

『増補越後名寄』。文政元年二月晦日、馬琴は、鈴木牧之宛書翰に、『増補越後名寄』写本三十巻を、先年、漸く手に入れ、秘蔵している、越後の名処、古跡、産物など、あらましがわかる、と記している。蔵書目録にみえない。

『漢書』。馬琴は、文政元年五月十七日の鈴木牧之宛『雁の翼』⁽¹⁵⁾に、雪蟬のことが『漢書』に出ている由であるけれども、『漢書』をくっつても見当らない、と書いている。『漢書』を所蔵していて、それを繰って見ることが知られる。所蔵目録にはみえない。

文政十一年八月十八日、住居の地主杉浦清太郎の弟法運が、『前漢書』『後漢書』を貸本として借りたい、と申し入れてきた。馬琴は、貸本とする書ではない、とお百をもって断わった。

『墨子』。文政七年閏八月七日の小泉蒼軒宛「令問愚答」の答に、『墨子』をあげており、蔵書目録にはみえないけれども、所蔵していたのであろう。

『埃囊抄』『節用早引』『俗語藪』。文政七年閏八月七日の小泉蒼軒宛「令問愚答」の答に、『埃囊抄』に国字多くみえることをあげ、愚老蔵弃本を先年貸し失なったので、穿鑿できない、と記している。天朝の俗字について、『節用早引』をあげ、唐山の俗字について、『俗字解』(写本)、『小説字彙』(板本)、『俗語藪』(板本)、『水滸伝抄訳』(板本)、『水滸伝解』(板本、写本)をあげている。蔵書目録に、『節用早引』『俗語藪』がみえない。『節用早引』を至極の俗書と説明している。

『書言字考節用集』。馬琴は、文政七年閏八月七日の小泉蒼軒宛「令問愚答」⁽¹⁶⁾の答に、『書言字考』『正字通』『字彙』を引いている。『正字通』『小説字彙』『続字彙』が蔵書目録にみえるけれども、『書言字考』はみえない。しかし、

『書言字考』を所蔵していたと考えられる。

『大和本草』。馬琴は、文政七年閏八月七日の小泉蒼軒宛「令問愚答」⁽¹⁶²⁾の答に、『大和本草』『本草綱目』をあげている。文政十年四月二十九日、『大和本草』『本草綱目』を披見して、山簪（じんちようげ）の出所を調べている。蔵書目録に、『本草綱目』はみえるが、『大和本草』はみえない。しかし、『大和本草』も所蔵していたのであろう。

『金翹伝』。文政十一年三月二十五日、森屋次兵衛が来宅して、馬琴が先日合巻に入用として申し入れた『金翹伝』が仲間内にもないと断わった。馬琴は、こちらで借り寄せて間に合わせる、と次兵衛に話した。山下町の筆工仙吉が借り出した届けてくれた。馬琴は、五月十一日、『金毘羅船』六編巻、式を持参した仙吉に返本し、見料を聞き糺して支払うと談じた。

馬琴は、文政十一年五月二十一日の篠斎宛書翰に、『風俗金魚伝』⁽¹⁶³⁾は、『金翹伝』を日本のことにつくりかえ、筋の悪いところを少々ずつ補って作ったもの、と書き送った。

『張注列子』。馬琴は、文政十二年六月十二日、『美少年録』二輯五の巻のなかで、文談に引いた古書、胡乱覚え懸りのため、本文を調べることとして、『張注列子』四冊を披閲して、思いがけず消日している。蔵書目録にみえないが、所蔵していたと思われる。

『金石印譜』。天保二年二月二十一日の篠斎宛書翰に、『金石印譜』⁽¹⁶⁴⁾から老拙の乾坤一草亭の印を、壮年になって見出し、模して以来用いている、と書いており、蔵書目録にはみえないけれども、所蔵していたと考えられる。

『輟楷録』『野客叢書』。天保二年八月二十六日の篠斎宛書翰に、杜甫の詩にある烏鬼について、『輟楷録』『野客叢書』などにも弁じている、と記していて、両書を所蔵したのであろうか、借覽して抄録したのであろうか。

『参考源平盛衰記』。馬琴は、天保三年六月二十一日の篠斎宛書翰に、当春、桂窓子から、『参考源平盛衰記』が松

坂にある由を聞いた、売物であれば買い取りたい、まず直段を承りたい、と書き送って頼んだ。七月朔日の桂窓宛書翰にも、当春出府された折に、写本が松坂にある由を承った、売物であれば買い取りたい、様子を後便で知らせてもらいたい、近來、記憶疎くなってきたので買いたい、と書いて頼んだ。

八月十一日、馬琴は、桂窓子当春云々、野老の聞き違えか、松坂にない由承った、輪池翁（屋代弘賢）所蔵の由、借用申し入れたところ、読んでいるので貸せない由、その後沙汰がない、翁は、人に書籍を貸すのを厭な様子、せんかたなし、と篠斎に書き送った。⁽¹⁶⁸⁾ 九月二十一日の篠斎宛書翰で心懸けてもらっていることに謝礼している。

『埤雅』。天保三年七月朔日の篠斎宛書翰に、馬琴は、飯田町近火の折、取り出した本箱くだけで、多く紛失した本のなかに、『埤雅』も含まれていた、と書き送った。亥年七月の火事の際に紛失多かった、というが、日記に、文政十一年、子、六月二十七日の飯田町火災の折、堀留山口殿長屋下へ、多くの手伝人によって荷物を出していることがみえる。亥年、同十年七月には飯田町火災の記事がみえない。その頃馬琴は、病臥していた。

『よしの物語』（『芳野物語』『吉野物語』）。馬琴は、天保三年七月朔日の桂窓宛書翰、綾足の『よしの物語』後編、幸便の折に届けて借してもらいたい、急がない、印行の折、上編五冊、寛政中代銀四匁で買い取って所蔵していた、飯田町旧宅近火の節に失なった、近來、江戸では見かけなくなった、古本で下直の本が松坂にあれば、後編貸される折に、上編を買い取って一緒に送ってもらいたい、前編も見たいので、下直の古本あれば買い入れて、一緒に送ってもらいたい、慰めものこと、急がない、連々心掛けてもらいたい、と書いて頼んだ。

『中山伝信略』（新板折本）。天保三年十一月四日、閨忠蔵内儀から使札あって、新板『中山伝信略』折本一冊を、未見ならばとて貸された。馬琴は、七日、地主杉浦氏老母に、『中山伝信略』を貸して、『琉球年代記』一冊を借用した。琉球人江戸に来ていて、『琉球年代記』『中山伝信略』など、新刻蔵板ものが二、三種出た、と日記にみえる。馬

琴は、十七日に、閨忠藏家内からの使札に預けて返本した。蔵書目録に、『中山伝信録』六冊がみえる。

『西洋紀聞』。馬琴は、天保三年十一月二十六日の桂窓宛書翰に、白石の著述『西洋紀聞』、寛政中に公儀へ差出し御留書となった秘書、老拙は、白石自筆の本を透き写しとした写本を所蔵し、秘して人に見せない、道中へ出せない、来冬出府の折、懇望であれば見せる、外へは話さないように、と書き送った。十二月八日の桂窓宛書翰別紙に、写本の白石叢書全三十冊などをあげ、『西洋紀聞』も大秘書として、貸進すると申し送った。天保五年七月二十二日、小葛籠へ入れてきたが、それには及ばない、取り出して書斎本箱へ移し入れた。白石叢書は蔵書目録にみえる。『おりたく柴の記』『藩翰譜』『本朝軍器考』『東雅』『読史余論』『古史通』『古史通或問』（抄録）『高子遊観記』（『高子遊観記』）『新野問答』（『黄白問答』）『白石詩草』『白石先生余稿』『金銀後代御条目』（白石案文せらし也）を、叢書のほかの蔵書としてあげた。『読史余論』『新野問答』は蔵書目録にみえる。なお、叢書の内において『黄白問答』は全本でなく、ほかにあげた本は全本、少しも欠なし、善本としている。

『後は昔物語』。天保十一年四月十一日の桂窓宛書翰に、馬琴は、『後ハ昔物語』、手透きの折によく調べて、あれば貸進する、と書き送った。五年前の払本の折に売ったかどうか覚えていなかった。八月二十一日、今日並便飛脚をもって送本した、と桂窓に伝え、十一月二十八日、桂窓からの返本を受け取った。桂窓は写しを作って返上した。蔵書目録にはみえないが、所蔵していた。

『赤城義士伝』。天保十二年閏一月九日の篠斎宛書翰（代筆）で、『義士伝』を昔年坊賈で見られた由、それは『赤城義士伝』のことか、片島氏の著述、全十五巻、カタ仮名、十五巻めに赤穂義士の小像があるもの、小子所蔵しているので、一の巻、十五の巻を、ほかの貸進のものと一緒に、今日並便で送る、飛脚問屋嶋屋佐右衛門方へ出した、と書き送った。蔵書目録にはみえないけれども、所蔵していた。

『平山冷燕』（『四才子書』）。天保五年二月五日、宗伯が、須原屋源介方に、『平山冷燕』があること、高料であったから引き下げるよう懸け合ったが引かないこと、を馬琴に伝えた。馬琴は、十四日、清右衛門に、『平山冷燕』一部を買い入れてくるよう、代金一分二朱を預けた。十七日、清右衛門方から下女をもって引き取り、十八日、披閱を始め、十九日、二十日、四冊を披閱を終えた。

天保三年四月二十八日の篠斎宛書翰⁽¹⁸⁾によれば、寛政、文化年中に、『平山冷燕』を金一分で買って所蔵したが、文化の末、小説ものがうっとおしく思うようになって、有用の他本と交易して手放したのであった。篠斎から、江戸の書肆でさがして貰いたい、と頼まれた。

よう／＼手に入れた馬琴は、披閱を終えて、天保五年二月二十六日、宗伯に申し付けて、篠斎方へ、『平山冷燕』一帙と、頼まれた『江戸名所図会』一部などを一包として、瀬戸物丁嶋屋へ届けさせて、篠斎方へ送本した。同日、篠斎へ書翰を出し、再閲したところ、古今無類の妙書、御秘蔵を、と書いた。神田正行氏の「天保期の馬琴と『平山冷燕』『両交婚伝』」に、再閲、再評価などの論述がある。

なお、前記天保三年四月二十八日の篠斎宛の書翰に、『漢楚演義』金一分二朱、『山中一夕話』金一方、『醉菩提』金二朱、寛政・文化年中に買い入れていたが、文化末に手放したことがみえる。

馬琴は、天保三年七月朔日の篠斎宛書翰によれば、享和年中から雅俗のこと耳底のため、『著作堂雜記』に記してきて三六巻ほどになっていた。その後、嘉永元年までに四〇巻に増えている⁽¹⁸⁾。そこで、「著作堂雜記抄」から書名を拾いあげてみる。

『堀川百首狂歌集』『慕景集』『新安手簡』『新著聞書』『閑田次筆』『秋七草』『平義器談』『東国太平記』『武林録』『大坂夏御陣図説』『誰が袖の海』『天竺三徳兵衛記』『煙霞綺談』『塩尻』『広貫』『類聚発句集』『擁書漫筆』『みちの

くばなし』『慶長年録』『寛永年録』『武家故実要言』『骨董集』『伊勢貞丈随筆』『鎌倉年中行事』『蜷川記』『下学集』『字彙』『和名類聚鈔』『兔園集』『遣老物語』『鱗斎漫筆』『鱗斎随筆』『松陰日記』『元和年録』『水滸伝』『拍案驚奇』『西洋記』『西遊記』『雅言集覽』『聞まゝの記』『五雜俎』『仁王経』『中阿含経』『長阿含経』『譬喻経』『萃野茗談』『翁草』『江戸浄瑠璃本』『里見軍記』『房総志料』『水滸後伝』『信州地名考』『江戸繁昌記』『紫の一もと』『玉勝間』『万葉集』『清俗紀聞』『投扇新興』『投扇興譜』『沙石集』『平家物語』『成形図説』『菟玖波問答』『將軍譜』『豊臣譜』

さらに、森文庫の『著作堂遺稿』(渥美正幹手写本)に、「著作堂雜記抄」にみえない書籍がある。

『甲陽軍鑑』『鈴録』『三吟未来記』『開口新語』『江家次第』『漢語抄』『東海談』『拾芥抄』『独考論』
渥見正幹編『曲亭雜記』にも、多くの書籍がみえる。

以上、取りあげた書籍のほかに、日記、書翰に、数多くの書籍が記されている。前記のように、『曲亭馬琴日記』別巻の索引「書物書画類」、『馬琴書翰集成』別巻の索引「一般書名」に、それらの書籍をみることができる。

さらに、神田正行氏があげられた京坂旅行中購入の書籍、「曲亭購得書目」にみえる書籍が知られる。

註

- (1) 天保五年二月八日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 一六一頁)、同年五月二日「桂窓宛書翰」(同書 二〇〇・二〇一頁)。
- (2) 天保五年八月十六日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 二二二頁)。
- (3) 天保五年正月十二日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 一五八頁)、同年二月十八日「篠斎宛書翰」(同書 一七八・一七九頁)。

- (4) 天保五年二月十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一七六頁。
- (5) 天保六年二月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 二二頁。
- (6) 天保六年三月二十八日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 五一頁。
- (7) 天保六年七月朔日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 七六頁。
- (8) 天保六年閏七月十二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 八六頁。
- (9) 天保五年二月十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一六八・一六九頁。
- (10) 天保五年五月二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一九四頁。
- (11) 天保五年五月二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一九五・一九六頁。
- (12) 天保五年七月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二二三頁。
- (13) 天保五年十一月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二二九・二四〇頁。
- (14) 天保六年正月十一日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 三頁。
- (15) 天保六年二月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 二〇頁。
- (16) 天保六年三月二十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 四四頁。
- (17) 天保五年七月二十一日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二二七頁。
- (18) 天保五年八月十六日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二三一頁)の十八日付の端書。
- (19) 天保五年十一月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二四六頁。
- (20) 天保十年八月十二日頃「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第五卷 一一二頁。
- (21) 天保五年十一月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二四九・二五〇頁。
- (22) 天保六年正月十一日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 七・八頁。
- (23) 天保六年三月二十八日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 五〇・五一頁。
- (24) 天保六年三月二十八日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 五〇頁。
- (25) 天保七年十月六日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 二〇九・二一〇頁。
- (26) 天保七年六月二十二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 一八五頁。

- (27) 天保七年六月二十一日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 一七四頁)。
 (28) 天保七年八月六日「篠齋宛書翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 一九八頁)。
 (29) 天保十三年八月二十六日頃「篠齋宛覺」(代筆)(『馬琴書翰集成』第六卷 四七頁)。
 (30) 天保十三年十一月二十五日「篠齋宛覺」(代筆)(『馬琴書翰集成』第六卷 六六頁)。
 (31) 天保十年八月十二日頃「桂窓宛覺」(『馬琴書翰集成』第五卷 一一三頁)。
 (32) 天保六年三月二十八日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 五二頁)。
 (33) 天保六年七月朔日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 七七・七八頁)。
 (34) 天保七年十月六日「桂窓宛覺」(『馬琴書翰集成』第四卷 二一一頁)。
 (35) 天保七年十月十一日「桂窓宛覺」(『馬琴書翰集成』第四卷 二二四・二二五頁)。
 (36) 天保十一年八月二十一日「桂窓宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二一三頁)。
 (37) 天保十一年八月二十一日「篠齋宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二〇二頁)。
 (38) 天保十一年十月二十一日「桂窓宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二一九頁)。
 (39) 天保十一年十二月十四日「篠齋宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二三三頁)。
 (40) 天保七年十月六日「桂窓宛覺」(『馬琴書翰集成』第四卷 二一〇頁)。
 (41) 天保十四年六月朔日「桂窓宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第六卷 七七頁)。
 (42) 文政十年三月二日「篠齋宛書翰」(『馬琴書翰集成』第一卷 一九二・一九三頁)。
 (43) 天保三年十月十八日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 二二四頁)。
 (44) 天保三年十一月二十五日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 二三八頁)。
 (45) 天保四年四月九日「河内屋茂兵衛宛覺」(『馬琴書翰集成』第三卷 五三頁)。
 (46) 天保五年正月十二日「河内屋茂兵衛宛別翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 一五八頁)。
 (47) 天保六年正月十一日「河内屋茂兵衛宛別翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 一八・一九頁)。
 (48) 文政十一年三月二十日「篠齋宛書翰」(『馬琴書翰集成』第一卷 二二三頁)。
 (49) 天保五年正月六日「篠齋宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 一五一頁)。

- (50) 文政十一年十月六日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第一卷 二二八頁。
- (51) 天保七年正月六日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 一三二頁。
- (52) 文政十二年八月六日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第一卷 二四五頁。
- (53) 文政十二年十二月十四日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第一卷 二五〇頁。
- (54) 文政十三年正月二十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第一卷 二五五頁、文政十三年二月二十一日「篠斎宛書翰」〔同書 一七〇頁〕。
- (55) 天保二年十一月二十五日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 八四頁。
- (56) 文政十三年正月二十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第一卷 二五六頁。
- (57) 文政十三年三月二十六日「篠斎宛書翰別紙」〔馬琴書翰集成〕第一卷 二九〇頁。
- (58) 天保三年九月十六日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二〇〇頁。
- (59) 天保三年十月十八日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二二三頁。
- (60) 天保三年十一月二十五日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二四〇頁。
- (61) 天保四年七月十四日「桂恣宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 八八頁。
- (62) 天保四年十一月六日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一〇七頁。
- (63) 天保二年四月二十六日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二二三頁。
- (64) 天保二年八月二十六日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 四六・四七頁。
- (65) 天保三年正月二十一日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一〇六頁。
- (66) 天保三年四月二十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一三〇・一三一頁。
- (67) 天保三年六月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一五五頁。
- (68) 天保三年七月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一六一頁、一六四頁。
- (69) 天保四年正月十五日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二〇頁。
- (70) 天保三年八月二十六日「黙老宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一九二頁。
- (71) 天保四年五月十六日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 六九・七〇頁。馬琴の評について、徳田武「続西遊記国

- 「字評」の史的位置と意義」(『早稲大学蔵資料影印叢書 国書篇 第三十卷 馬琴評答集(四)』月報28 早稲田大学出版部 一九九〇年)がある。
- (72) 天保四年五月十六日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 七四頁)。
 (73) 天保四年七月十三日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 七六頁)。
 (74) 天保二年四月二十六日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 三二頁)。
 (75) 天保四年四月九日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 五三頁)。
 (76) 天保二年十一月二十五日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 八三頁)。
 (77) 天保三年二月十九日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一六頁)。
 (78) 天保三年四月二十八日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一四四頁)。
 (79) 天保三年四月二十八日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一四一頁)。
 (80) 天保三年六月二十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一五四頁)。
 (81) 天保三年七月朔日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一六三頁)。
 (82) 天保四年三月八日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 三九頁)。
 (83) 天保七年正月六日「篠斎宛別翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 一三三頁)。
 (84) 天保七年六月二十二日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第四卷 一八一・一八二頁)。
 (85) 天保十年六月九日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第五卷 九三頁)。
 (86) 天保十年八月八日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第五卷 一〇四・一〇五頁)。
 (87) 天保十一年八月二十一日「篠斎宛追啓」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二〇八頁)。
 (88) 天保三年四月二十八日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一二四・一二五頁)。
 (89) 天保三年二月十九日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一九頁)。
 (90) 天保三年九月十六日「河内屋茂兵衛宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 二〇〇頁)。
 (91) 天保三年四月二十八日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一三七・一三八頁)。
 (92) 天保三年七月二十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一七五頁)。

- (93) 天保三年八月十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一七九・一八〇頁。
- (94) 天保三年八月十六日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一八八・一八九頁。
- (95) 天保三年四月二十八日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一四一頁。
- (96) 天保三年九月十六日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一九八・一九九頁。
- (97) 天保三年七月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一六〇頁、一六五頁。
- (98) 天保五年十一月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二四六頁。
- (99) 天保六年二月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 二〇頁。
- (100) 天保七年正月六日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 一三三頁。
- (101) 天保七年六月二十二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 一八一・一八二頁。
- (102) 天保十年六月九日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第五卷 九三頁。
- (103) 天保十年八月八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第五卷 一〇四・一〇五頁。
- (104) 天保十一年八月二十一日「篠斎宛追啓」(代筆)〔馬琴書翰集成〕第五卷 二〇八頁。
- (105) 天保三年七月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 一六〇頁。
- (106) 天保三年十一月二十五日「河内屋茂兵衛宛書翰」第二卷 二三八・二三九頁。
- (107) 天保三年十月二十一日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二三八頁。
- (108) 天保三年十一月二十五日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二三八頁。
- (109) 天保四年四月九日「河内屋茂兵衛宛覚」〔馬琴書翰集成〕第三卷 五四頁。
- (110) 天保三年十月二十一日「河内屋茂兵衛宛書翰」第二卷 二二八頁。
- (111) 天保三年十一月二十五日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二三九頁。
- (112) 天保六年正月十一日「河内屋茂兵衛宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 一八・一九頁。
- (113) 天保三年十一月二十五日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二三九頁。
- (114) 天保三年十一月二十六日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第二卷 二五六頁。
- (115) 天保五年二月八日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一六七頁。

- (116) 天保三年十一月二十六日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第二卷 二五六・二五七頁〕。
- (117) 天保三年十二月八日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第二卷 二七一頁〕。
- (118) 天保三年十一月二十六日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第二卷 二六二頁〕。
- (119) 天保四年十一月六日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第二卷 一一六・一一七頁〕。
- (120) 天保五年二月八日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 一六〇頁〕。
- (121) 天保五年二月十八日「篠齋宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 一八〇頁〕。
- (122) 天保七年三月二十八日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第四卷 一六八頁〕。
- (123) 天保七年六月二十一日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第四卷 一七二・一七三頁、一七七頁〕。
- (124) 天保七年八月四日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第四卷 一九二頁〕、天保八年六月十六日「桂窓宛書翰」〔同書 三三三頁〕。
- (125) 天保八年八月十一日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第四卷 三四七頁〕。
- (126) 天保十年六月九日「篠齋宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第五卷 九三頁〕。
- (127) 天保十年八月八日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第五卷 一〇八頁〕。
- (128) 天保三年十二月八日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第二卷 二八二頁〕。
- (129) 天保五年正月六日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 一五四頁〕。
- (130) 天保六年二月二十一日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第四卷 二九頁〕。
- (131) 天保四年正月十四日「桂窓宛別翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 八頁〕。
- (132) 天保四年三月九日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 四二・四三頁〕。
- (133) 天保四年七月十四日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 八七・八八頁〕。
- (134) 天保四年十一月六日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 一一四・一一五頁〕。
- (135) 天保四年三月九日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 四三頁〕。
- (136) 天保四年七月十四日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 九〇・九一頁〕。
- (137) 天保四年十二月十一日「桂窓宛書翰」〔『馬琴書翰集成』第三卷 一三四頁〕。

- (138) 天保四年十一月六日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一一五頁。
- (139) 天保四年四月九日「河内屋茂兵衛宛覚」〔馬琴書翰集成〕第三卷 五三頁。
- (140) 天保四年五月朔日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 五五頁。
- (141) 天保四年五月六日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 六七頁。
- (142) 天保四年七月十四日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 八九頁。
- (143) 天保四年四月九日「河内屋茂兵衛宛覚」〔馬琴書翰集成〕第三卷 五四頁。
- (144) 天保四年五月六日「河内屋茂兵衛宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 六七頁。
- (145) 天保四年七月十四日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 九二・九三頁。
- (146) 天保五年二月八日「桂窓宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一六七頁。
- (147) 天保五年二月十八日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一七九頁。
- (148) 天保五年五月二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一九二頁。
- (149) 天保五年五月二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一九六・一九七頁。
- (150) 天保五年七月二十一日「篠斎宛書翰断簡」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二二四・二二五頁。
- (151) 天保五年十一月朔日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 二四五・二四六頁。
- (152) 天保六年正月十一日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 四・五頁。
- (153) 天保六年二月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 二〇頁。
- (154) 天保五年五月二日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第三卷 一九六・一九七頁。
- (155) 天保六年正月十一日「篠斎宛別翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 四頁。
- (156) 天保六年二月二十一日「篠斎宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第四卷 二〇頁、二五頁。
- (157) 文政元年二月三十日「牧之宛書翰」〔馬琴書翰集成〕第一卷 三三頁。
- (158) 文政元年五月十七日「牧之宛『雁の翼』」〔馬琴書翰集成〕第一卷 三五頁。
- (159) 文政七年閏八月七日「小泉蒼軒宛『令問愚答』」〔馬琴書翰集成〕第一卷 一六六頁。
- (160) 文政七年閏八月七日「小泉蒼軒宛『令問愚答』」〔馬琴書翰集成〕第一卷 一六一頁、一六四・一六五頁。

- (161) 文政七年閏八月七日「小泉蒼軒宛『令問愚答』」(『馬琴書翰集成』第一卷 一五九・一六〇頁、一六三頁)。
- (162) 文政七年閏八月七日「小泉蒼軒宛『令問愚答』」(『馬琴書翰集成』第一卷 一五八頁)。
- (163) 文政十一年五月二十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第一卷 二二三・二三四頁)。
- (164) 天保二年二月二十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一二頁)。
- (165) 天保二年八月二十六日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 四〇頁)。
- (166) 天保三年六月二十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一五四頁)。
- (167) 天保三年七月朔日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一六九・一七〇頁)。
- (168) 天保三年八月十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一八〇・一八一頁)。
- (169) 天保三年九月二十一日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 二〇九頁)。
- (170) 天保三年七月朔日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一六〇頁)。
- (171) 天保三年七月朔日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一六九頁)。
- (172) 天保三年十一月二十六日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 二五七頁)。
- (173) 天保三年十二月八日「桂窓宛書翰別紙」(『馬琴書翰集成』第二卷 二八四頁(二八六頁))。
- (174) 天保十一年四月十一日「桂窓宛書翰」(『馬琴書翰集成』第五卷 一八二頁)。
- (175) 天保十一年八月二十一日「桂窓宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二二五頁)。
- (176) 天保十一年十二月十四日「桂窓宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二四〇頁)。
- (177) 天保十二年閏正月九日「篠斎宛書翰」(代筆)(『馬琴書翰集成』第五卷 二六三頁)。
- (178) 天保三年四月二十八日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一二四頁)。
- (179) 天保五年二月二十六日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第三卷 一八三頁)。
- (180) 神田正行「天保期の馬琴と『平山冷燕』『両交婚伝』」(『読本研究新集』第五集 二〇〇四年)。
- (181) 天保三年七月朔日「篠斎宛書翰」(『馬琴書翰集成』第二卷 一六〇・一六一頁)。
- (182) 難波常雄・神戸龍治・文傳正興編纂校訂「著作堂雜記抄」(『曲亭遺稿』一九一一年 国書刊行会「緒言」) 播本眞一氏は、「馬琴旧蔵自筆資料二種紹介」(『早稲田大学蔵資料影印叢書 国書篇』第四十二卷 南総里見八犬伝稿本(一)』月報39

号 早稲田大学出版部 一九九三年)に、馬琴が、日本の故事を中国の類書の配列にならって抄録を集めた『故事部類抄』五冊を編集したこと、その抄録の対象とした書籍が、『古事記』『日本書紀』『続日本紀』『日本三代実録』『東鑑』『元亨釈書』『平家物語』『太平記』『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『無名抄』『雍州府志』などであったこと、を紹介している。

(183) 『著作堂遺稿』(大阪市立大学学術情報センター蔵 森文庫)、渥見正幹写 一冊。調査を支援下さった大阪市立大学大学院経済学研究所教授大島真理夫氏に深く謝意を表す。正幹については、木村三四吾他編校『吾仏乃記 滝沢馬琴家記』(一九八七年 八木書店)解説(六八四・六八五頁)がある。

(184) 蓑笠漁隠滝沢解遺草 依田百川批評 渥見正幹編輯『曲亭雜記』(一八八八・八九年 渥見正幹刊 国立国会図書館マイクロフィッシュ)。

(185) 神田正行『馬琴と書物―伝奇世界の底流―』(八木書店 二〇一一年)。氏は、馬琴の作品と馬琴の蒐集との関連について詳論し、そのなかで、「曲亭購得書目」を紹介し、享和文化年間の購書、中国白話小説の購書を明らかにし、馬琴の考証について、『塩尻』をあげて論述し、『水滸伝』諸本など、中国白話小説の受容と評価を詳らかにした。

第一一五集(一)の追補

八頁の山本宗英について、年不詳の十二月二日の山本宗英からの来翰(『馬琴書翰集成』第六卷 二九八頁)の貼紙に、「山本宗英 奥医師法眼、神田小川町住、琴嶺の師」の記事がみえる。

八・九頁の筆工について、天保十三年九月二十八日の篠斎宛書翰(『馬琴書翰集成』第六卷 六一頁)に、『禹鑿堂漫録』五巻を、下谷の御徒歩衆の走書名人に写させていることがみえる。

二三・二四頁の『水滸後伝』について、天保七年十一月三日の桂窓宛書翰(『馬琴書翰集成』第四卷 二二七・二三八頁)によれば、馬琴は、桂窓の蔵本『水滸後伝』と馬琴自作蔵本の旧作合巻二五部・薄物本とを、桂窓の申出を受けて交易している。『吾仏乃記』の「蔵書沽却の損益」のなかに、関連記事がみえる(三二五二頁)。

追補

『紫の一本』『むさしあぶみ』『洞房語園』『新吉原由緒書』『三芝居由緒書』『長吏団左衛門由緒書』。馬琴は、天保五年八月十六日の桂窓宛書翰（『馬琴書翰集成』第三卷一二三・一二三四頁）に、江戸のことをみるには、『江戸志』のほか、『紫の一もと』など二〇余の書籍・江戸図をすゝめ、御覧されたいのであれば貸進する、『武威風土記注疏』『浅草志』は所蔵していない旨を認めた。所蔵しているとしてあげた書籍のなかに、所蔵目録にみえないものがある。天和の写本の写し『紫の一もと』、明和の印本『むさしあぶみ』、写本、印本の『洞房語園』、『新吉原由緒書』、『三芝居由緒書』、『長吏団左衛門由緒書』が目録にみえない。なお、神田正行氏が紹介された前記の「曲亭購得書目」にもみえない。

『馬鑿堂漫録』天保十三年九月二十六日篠齋宛書翰（『馬琴書翰集成』第六卷六一・六二頁）に、全五巻を、下谷御徒歩衆で走書の名人に筆料金一兩一分で写させたことがみえる。紀州の学士某弥学の随筆、友人文宝亭の紹介で序文と校訂を頼まれたが、潤筆料の件で破談して原本返送を催促されたので、急いで写させて返本した、といふ、篠齋に売り渡すべく見本一巻を送本した。近來の随筆の第一の好書、年來の愛書、是迄、誰にも見せていない、と申し送っている。写させた時期については詳らかでない。

『太閤伝』『御省録』『里程貴考』。年不詳九月二日の屋代弘賢からの來翰（『馬琴書翰集成』第六卷二九五頁）によれば、屋代弘賢が、馬琴から恩借した『名所記』全部を返進している。年月不詳の屋代弘賢からの書翰（『馬琴書翰集成』第六卷二九七頁）によれば、弘賢が、『太閤伝』『御省録』を馬琴から貰って、多謝と礼を述べ、『里程貴考』一冊を返上し、委曲、関氏のところまで面会して承る、会談中で勿々答えたい、と伝えている。

訂正・削除 第一一七集

一五六頁

六行目 茂兵宛↓茂兵衛宛

一一行目 骨組をしかり↓しかり

一六二頁

一五行目 骨組をしかり↓しっかり

一六五頁

七行目 「返送した……を受けた、」を削除する。

八・九行目 「深川屋敷……落丁本のまゝ、にしておく、」を削除する。

一七四頁

二行目 十二月下旬までは↓までには